

あした

雄良 景

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幸村精市♀の谷山麻衣ポジション成り代わりです。原作麻衣不在注意。また、女子が男子テニスに混ざる設定上ご都合主義世界観改変があります。

基本GH勢メインのコミック版主軸原作沿い。テニプリ勢は役職持ち、立海勢が少し出演予定。オリジナル立海テニス部モブに名前と設定と個性と役割を持たせて登場させる予定もあります。



夢が潰えたわけじゃない
明日が消えたわけじゃない
希望を失ったわけじゃない
私が私であるために
誇りだけは守りたかったから
新しい風をかき分けて進むよ
知らない世界を歩みながら

大丈夫さ、信じてる。

目次

愛する友へ捧ぐ	1
五つ目の黒	13
晴れのち下駄箱 (VS 神の子)	38
余計なこと (気づいたしされるし)	55
彼女の視界 (異世界かそれとも)	71
仕事開始 (まずは知ってもらおうか)	84
さっそく波乱万丈 (落ち着く時間が欲しい)	99
奇々怪々のファンファーレ (揃った盤上)	129

愛する友へ捧ぐ

世の中にはどうしようもないことというものがあって、それを引き当てた人のことを不幸と呼ぶのだろう。

—— 例えばそれは、私が病気になったことだったり

—— 例えばそれは、すでに過ぎ去ってしまったあの夏の日の敗北だったり

悔しくないわけがないけれど、悲しくないわけがないけれど、過ぎたことならばどうしようもなく、努力ではどうにもならないところから降り注いだそれをただ嘆いていてもしょうがない。

ただ。—— ただ、これからならば、まだ。

思い返せば、一般人にしては不幸の多い人生だったのではないだろうか。胸をかきむしりたくなる苛立ちがあった。呼吸を忘れるほどの絶望があった。

けれど今、私が立っていられるのは、その先で得たものがそれ以上に美しかったから。

私の選択がどう転ぶのかは分からなかったけれど。ただ、そう、それでも確実によりよい未来へ進むための布石になると、ここから信じられたから。

彼らならきつと大丈夫だと疑わなかったから。

大切に思うものを守る一手だと譲れなかったから。



「ひッ、ヒッ、ぜんっ、ぜんぱっ、ヒグ、ツ卒業おっ、う、おめ、と、っざいま、あ、あ、あああああ…っ!!!」

「うっわ赤也お前、顔すっごいことになってるよ」

幼児返りしたようにわんわんと泣く後輩にティッシュを差し出せ

ば、ビービーと鼻をかんでまた泣く。

式の時から泣いていたのは壇上から丸見えだったので知っていたが、何時間泣いてるんだこいつは、と呆れる。周りの生暖かい目が痛いったらない。

もちろん嬉しくはあが、脱水症状になりそうなくらい泣いているものだから呆れが勝る。

ギャンギャンにやあにやあと泣き喚く可愛い後輩に、それぞれの友人たちと話していたレギュラー陣が寄ってきて、しようがない奴だと呆れながら世話を焼いている。

真田はしかめっ面で「みつともない、たるんどる」とぶつくさ言うが、そのくち元が少し笑っているものだから「にやけ面で何を」とこちらも笑ってしまうのは仕方がないだろう。

まあにやけ面は全員なんだけどさ。

——みつともなく泣きわめく手のかかる後輩。けれど、彼の口から出るのは祝いの言葉だ。決して私たちを引き留めるようなものではない。

寂しい寂しいと泣き喚くくせに、おめでとうございませと嗚咽を漏らす。——頑張るから、どうか信じてくれと。

それがこの子の成長を表しているようで。あの子もあの子なりに、望む未来のために前を向いていると示しているようで。

「眩しいなあ」

あんなやんちゃな悪ガキが、こう成長するものか。子供の成長を守る親のような心境になる。

「なあ赤也。懐かしいね。2年前の4月に、お前がテニス部に来たんだ。意地っ張りで言うことを聞かない手のかかる後輩だったけど、私はお前に未来を見たよ」

尊い子だった。愛しい子だった。光のような子だった。立海わたしたちに

とつての未来だった。

そつと、ようやく涙の止まった赤也の頬を撫でる。2年前はまろみを帯びていたそこはいつの間にかするりとしていて、この子がひとつひとつ幼さを脱ぎ成長してきたことを実感させる。

「漫画みたいに果たし状を持つてきたときは笑ったなあ。字が汚いし誤字ばかりで、真田と柳と解読するのに四苦八苦しただけ」

思わずというように柳がふふ、と笑う。真田も思い出したのか帽子を下げて溜息を吐いた。

視線を赤也から上げれば、少し離れたところで他のテニス部の子たちが固まっているのを見つけた。こちらの様子をうかがっている様子に、気を使ってくれていることを察する。

優しい子たちだった。尊い子たちだった。こんなにも大切に、愛してくて。

おいで、と笑いかければ、待っていたかのように次々と駆け寄ってきてくれる。そこに彼らから向けられたところが見えて、心臓がギユツと重たくなった。

そつと、赤也の頬から手を離す。

「お前にも、みんなにも、たくさん苦勞をかけたね」

——思い出す。思い返す。今までのこと……積み上げてきた選択と、あやまちを。

「私は、その選択で罪を成したよ」

「私たち、です」

瞬時に柳生が切り込んでくる。眼鏡の奥から射貫くような視線が刺さり、それがくすぐったくて。

——そうだね、お前たちは、いつもそう言ってくれたね。

「それでも、——私はテニスが好きだ」

真田と柳がグツと私に近づいて、それに倣うように、みんなが隙間を詰める。

とうとう、ぐるりとテニス部が私を囲んだ。

誰もが私の声を真剣に聞いてくれる。道を間違った、苦勞を強いた私を信じてくれている。

「私はテニスをしていたい」

大げさと言われてもいい。——テニスは私の人生だ。

病院のベッドで発狂しそうな心を必死に掻き糞った日々を思い出す。

例え地獄に落ちたとしても、これ以上の責め苦などないだろうと思った。ただひたすらに絶望が胃の腑を焼く。自分の足で立てない。ラケットを握れない。ボールを追いかけられない。

ころしてくれよと、よく言わなかった。今でも、当時を振り返ってそう思う。

もう二度と、あんな思いはしたくない。私から人生が奪テニスわれるのならいつそ——そう思ってしまうような自分が、胸の真ん中にいるのだ。

「——みんなが好きだ」

好きだよ。ずっと、ずっと。コートから見える景色にお前たちが居ることが、どれほど私の幸福だったか。お前たちが嬉しそうに楽しそうに笑うたび、どうかそれが永遠であれと思った。お前たちが私を想って悲しむたび、悲しくて情けなくて涙が出た。

分かるかな。私がベッドの上で、常勝を掲げたお前たちが無理をしていないかどれだけ不安になったか。

自分と違いテニスができるお前たちが、どうしようもなく羨ましかったことが。

そんな自分が嫌で仕方なかったことが。

私が、お前たちのいるコートに、どれほど戻りたかったか。

そんな私を、どうか、どうか、知らないまままでいてほしいと、思うことを。

「みんなと、テニスがしたかった」

したかったよ。私の宝物たち。

けれど私は私の信条に則って、選んだから。今度こそ、この選択は間違いではないと思いたい。

「部長でありながら、お前たちに自分たちの尻拭いをさせることになってしまったことを謝りたい。不甲斐ない先輩だった。すまない。」

謝罪に合わせて目を伏せれば、私を囲っていた部員たちが動き出す。輪が裂け、後輩たちは目の前に、レギュラー陣は横につき、同じく卒業する同学年の仲間が後ろに並ぶ。

赤也も、静かに下がって後輩の列に混じった。

並んだみんなを見回す。ああ、そうだ。彼らとともに、精一杯だった3年間だった。

苦労ばかりを掛けた。背負わせるだけ背負わせて、それでも、どうか身勝手ながら言わせてほしい。

「勝ってくれ」

——また、夏が来る。

「私たちのテニスは青学のようなテニスではなかった。けれど、それ

自体は間違いだったとは思わない。」

「私たちが居なくなつた立海テニス部は、また新しい姿になるだろう」「けれど」—— 周りはお前たちに、王者奪還を願う。理想を、重荷を、押し付ける。」

「私たちの至らなさがお前たちに苦勞をかける。本当に、申し訳ないと思つている。」

「……それでも、どうかお前たちは」

「お前たちは、お前たちのテニスで」

「自分たちで作り上げた立海テニス部のプレーで」

「勝つてくれ」

—— 1年越しの優勝旗を、立海の玉座に。

スツと静まり返つた空間に、後輩たちの嗚咽が響く。∴後輩だけではない、後ろに並んだ卒業生たちからも抑えきれない声が漏れ聞こえる。

この言葉を私が言う権利が、どこにあるだろう。それでも、恥知らずだろうと、同じ傷を負つてほしくないと思ふのが先輩心じゃないか。

立海のテニスは、『勝つ』テニス。きつとその根本は、新体制になつても変わらない。

—— けれどどうか、ラケットを振るあの興奮を、魂を揺さぶる幸福を、どうか忘れないでくれ。

「幸村先輩」

一步、ひとりの後輩が前に出る。

赤也の隣に並んでいた、柔らかい白髪はくはつと温和な雰囲気を持つ後輩のひとり。それは幸村が次代の立海テニス部を支える支柱として選んだ子だった。

謙虚で誠実で、周りからの信頼も厚く、視野の広さで部員たちをよく支えてくれるだろうと選んだ次代の部長。石橋を叩いて渡る慎重な性格が過ぎてチャンス逃してしまいそうになる心配点はあるが、副部長となった赤也がその破壊力、行動力で補って、そうやってお互いが支え合って、きつと立海テニス部をより良いものにしてくれるだろうと選んだその子は、まっすぐ私を見ていた。

「玉川」

名を呼べば、玉川はグツと顔を歪める。泣きそうなのをこらえているのは一目瞭然だった。まぶたの痙攣、噛み締めた唇は震えて、――
――震える手で、何かを差し出してきながら、深く深く、頭を下げられる。

腰が90度になるくらいに下げられた頭と、差し出されたものに面食らってしまう。

それは写真だった。3年生が引退した日に撮った、テニス部全員の集合写真が入った写真立てだった。

人数が多くてひとりひとりの顔が小さくなった、ウチにしては珍しい、整列していないごちゃごちゃとした写真。それが入った写真立ては、木枠に紙粘土と貝殻で装飾された、子供の工作のようなものだった。

手が、震える。

ガチ、と思わず奥歯が鳴る。

ゆっくり、時間をかけて、落とさないようにそれを受け取る。

それでも玉川は頭を上げなかった。

「あなたたちがコートに立つ姿が好きでした。世界で一番カッコよくて、一生分憧れました」

「強豪校として、王者として積み上げた努力も、周りから重い期待を向けられることも、大変ではあったけど苦労なんかではありませんでした」

「幸村先輩を待ち続けた日々も、常勝という道も、我々が自分の意志で選んだ道です。そこにあなたたちから謝罪を受ける理由はありません」

玉川の声が震える。何かを言い出してしまいそうで、とつさに歯を食いしばる。

「——確かに、俺たちは間違っただけど、責められることだったと思うけど……」

「きつと先輩は、先輩たちは、ずっとそれを忘れないかもしれないけど……！」

『勝つ』ことが立海のテニスだった。そのために、私たちは、私は、選択を誤った。

選んだ道は、相手のテニスを——仲間のテニスを、失わせる可能性のあるものだった。

私の選択は、仲間すら殺そうとした。

「だったら、一緒につ、覚えててください……っ」

それでもお前は。お前たちは。

「俺たちは、それでもそんなあなたたちが、大っ好きでした……！」

——眩しいなあ。

頬伝った熱が、地面にシミを作る。

赤也が、一歩進み玉川の横に並ぶ。そこには子どものような泣き顔はなく、ひとりの、部を背負うエースの顔をして、普段からは想像もつかないくらい静かな声で言う。

「勝ちます」

ああ――

「いままで、ありがとうございます!!!」

「!!!」

「ありがとうございます……!!!」

とうとう、その苦しさに目元を片手で抑えた。

ああ、息が苦しい。胸が圧迫されている。――溢れるくらいに満たされた心が、肥大化して心臓を押しつぶしてしまっただった。

全国大会。初めて負けた。

一生知らなくてもよかったとすら思った敗北は、立海ほこりに泥を塗ったと思った。

呆然とした。自分が終わらせたものはなんなのか。現実を前に、今までの選択を思い返した。

――どこから間違えたのだろうか。

息の仕方も忘れるような、すべてがスローになった世界の中で、それでも涙は出なかった。

それなのに、今。みつともなくこぼれる涙が止まらない。こんなはずじゃあなかったのに。積み上げた罪過から目をそらすように自己満足に浸ってはいけないと、みんなで決めたのに。

それでも、ごめんなさい。どうかこの喜びを赦してくれ。よかった。

帰ってこれてよかった。

生きててよかった。

お前たちという仲間がいること幸福が、何よりうれしい。

目元を押しさえる手のひら越しに視界が暗くなる。何か情けない顔を覆い隠すように乗っかている。

ああ――真田の帽子だ。

「常ッ勝オツ!!」

まだ寒さの残る3月の空に前振りもなく響いた、ドスの効いた真田の声。

「二二」 立海ツツツツ
!!!! 「二二」

——それでも、全員がぴったりと声を合わせて叫び返す。
一糸乱れぬその応えが、積み上げてきたものが確かなものであったのだと証明してくれるようで、聞き慣れた掛け声が世界で一番頼もしく聞こえた。

「つぐ、う、う、——!!」

ちくしよう、馬鹿真田め。お前の帽子から加齢臭するんだからな。汗臭いし。……今だけは、黙っててやるけどさ。

嗚咽が漏れる。肩を抱いたのは柳だろうか。何かを言おうにも喉が震えて言葉にならなくて。

ごめんねみんな、あと少しだけ待ってくれ。まだ少し、息が整うまで。



「幸村」

「うん?」

「いつ引っ越すんじや」

——その後、玉川たち後輩一同と同級生たちは「あととはレギュラー陣で、積もる話もあるでしょうから」と退散していった。最後まで気を使ってくれる、優しい仲間たちだった。

残ったメンバーと、お互いが赤くなつた目を恥ずかしげにこすり

ながら帰路につく。

前を歩く赤也の真っ赤な目元や鼻頭をからかう丸井に、噛みつくように吠える赤也をほのぼのと眺めていれば、すすす、と寄ってきた仁王が無表情に聞いてきた。

それ今聞く？ とは思いながらも、そう言えばいつていなかっただと、明日の朝イチだと答えれば、「ほうか」とちから無い声が返される。

無表情だ。それでも、うつむいた顔が寂しいと訴えてくる。まるで小さな子に我慢をさせている気分になって、しかたないなあ、と歩きながらその体によしかかれば、くつついたからだから少しだけ震えを感じる。ほんとに、仕方のない子だ。

いつの間にかみんなの視線はこちらを向いていて、その誰もが寂しそうな顔をしている。赤也なんて、ようやく泣き止み始めたつていうのにまた涙を溜めて、さっきの凜々しい顔はどこに行ったんだか。――

それでも、涙をこぼしはしなかった。

――ああ、ここが私の居場所だ。

「大丈夫だよ」

――私も、お前たちも。

だからそんな顔するなよ。今生の別れでもないっていうのに。

「それともお前たち、まさか私にもう二度と会わないつもりだったの？ 学校が変わったから縁も切るだなんて薄情な奴らだな」

「はっあゝゝゝ?!?!? んなワケないじゃないっすかあ!!」

「たわけ！ そんな生ぬるい繋がりがなわけがあるか!!」

「ちゃんと毎日連絡するよい、ジャツカルが！」

「俺かよ!! いやしてえけど!!」

「それで俺も電話するから、幸村君はちゃんと出てくれるだろい？」

「ほんじゃあ俺は遊びに行くぜよ。週一ナリ。」

「女性の部屋に軽々しく出入りするものではありませんよ、仁王くん。せめて月一です！」

「新生活一週間で前恋しさに暴走する奴が出る確率100%、だな」

「ふ、ふふ、あはははははっ」

「それなら俺もー」「たるんどるー」夕暮れに差し掛かった住宅街にご近所迷惑な声が響く。みんなのちからいつぱいの言い分に思わず大きな声で笑ってしまった。

ちよつとした軽口に過剰反応した彼らは、毎日連絡してきて、月一で遊びに来てくれるらしい。私のこと大好きだなと揶揄えば、恥ずかしそうにしながらも誇らしそうな顔をするものだから余計笑ってしまう。

「連絡なんて、そんなになくていいさ。通信代だって馬鹿にできないんだから。あと、遊びに来るのは家主に許可をもらえたら、ね。私は居候の身になるんだし」

「……………ちなみにまだ幸村くんがあいつんちに居候するの、嫌だなんて言ったら？」

「あっはっは、くどいね！」

—— ああほんと、かわいいやつらだよ、まったく。そんなお前らだから、守りたいって思うんだ。

「愛してるよお前ら」

五つ目の黒

「かいだんばなし?」

「そうそう!今日の放課後みんなでやろーと思ってるんだけどさ、幸村さんも、どうかかな?」

「かいだんばなし? 怪談のことだよな? ミチルちゃんたちが構わないのなら、是非」

「やった!」

春うららかな4月の某日、ゆつくりと流れ始めた新しい日常に、舞う桜を楽しんでいたその日。入学当初から何度か話しかけてくれた子に怖い話をしようと言われたので、喜んで応じることにした。領けばその子、ミチルちゃんが嬉しそうにっこりと笑うから、つられてこちらも笑ってしまう。

中学を卒業し、私は東京某所にある私立校に入学した。理由としては、完治したとされている例の悪夢の経過観察。というのも、私が罹患したあの病気はギランバレー症候群によく似た免疫系の病気——つまり、正確な病名のない、研究の進んでいない病だ。現状完治したと診断されようと、その後どうなるかがかなり不透明なため、しっかりとした検査を続ける必要がある。

——そして裏の理由が、準優勝の汚名へ向けられるヘイトを後輩たちから逸らすこと、である。

私があの大大会の後にどれほど功績を挙げようと、あの大大会の決勝戦で敗北し、結果として立海が優勝を逃したという事実は変わらない。多くのテニスファンはそうではなくとも、準優勝という一点で心無い言葉をかけてくる訳知り顔の他人は腐るほどいるもので。

ましては、決定打となった敗北をもたらしただのが、女の部長だという事実は、そんな有象無象が石を投げるにはもってこいの的となる。病み上がりで、女で、なのに部長で。詳しくもない声の大きいだけ

の愚か者は、やれああだこうだと騒ぎ立てる。同情？忖度？そんな生ぬるい実力で国際ライセンスを取れるわけがないのに————なんて、そんな正論は彼らには通用しないのだ。耳が詰まっているのかな。

だから通院はいいきっかけでもあった。理由はどうあれ私が立海から離れば、その裏事情を推察したくなるものだ。そうすれば、少なくとも視線は後輩たちから離れ、ほとんどが私、そして私と同年代の部員たちに移るだろう。

それが、最後に私たちが後輩たちへしてやれることだと、みんなを決めた。

さて、そんな覚悟を決め愛すべき友人たち、そして家族と離れ新天地へ来たはいいものの、その新生活において実は重大な悩みができた。

それは、クラスメイト達にどこか遠巻きにされているということ。つまり——友人が、できない。

この学校が中高一貫校なため高校からの入学者は少なく浮いてしまふ……というのは想定していたが、ここまでとはさすがに。

おかしいな……コミュニケーションが下手な方ではなかったと思っていたのだけど……と思ったが、よく考えてみれば中学時代に関わっていたのは部活仲間か委員会仲間ばかりだった気がする。事務連絡とかも、基本的には同じクラスのテニス部が教えてくれたし……こっちから話しかける話題も特にないから話しかけられないと関わることも少なかった……？

もしかして私、普通の友達が、少ない？——気づいた事実に愕然としてしまったのは仕方がないはずだ。

かといって改善しようとアクションを起こそうにも、なぜか話しかけただけで畏縮されてしまうのでそれ以上声をかけるのが難しい。恥を忍んで仲間たちに電話で相談を試みたが「時間が解決してくれるだろうから、お前が何か変わったたり無理をする必要はない」と言われるばかりで、困り果ててしまった。みんなのことは信頼しているが変に過保護なところがあるので、鵜？みにはできないのだ。一緒に悩

んでくれたの玉川とジャツカルだけだったし。

そんなことで今までにない悩みに途方に暮れていた私に、比較的積極的に話しかけてくれていたのがこのミチルちゃんである。これがほんとうにありがたかった。当たり前障りのない会話しかしてなくとも好感度がぐんぐん上昇した。

だからこそ、この怪談はチャンスだ。メンバーは恵子ちゃんと仲のいい女の子ふたりを交えた4人。これを機に友達になれるかもしれない。

——友達、作るぞ！

グツと意気込んでみたものの、まあ内容が内容なので少し間抜けである。気持ちはでっかいけど。

それにしても、怪談。何度かやったことはあるけれど、相手は基本男子中学生だったので、同性の子たちとやるのは未知数だ。……女子高生ってなんか特別なルールとかあるのかな。

■

——そうやって悩む幸村は気づかない。

「うひゃくやっぱ幸村さん超美人。いいにおいする……」

「あれで勉強も運動もできるんだからヤバイよね……」

「同じ女なことが我ながら信じられなくなってきた」

「むしろ同じ人類というくりに収まってすみませんみたいな」

——そんな声は聞こえていない。

■

「でね、女の人はおまわりさんを連れて公衆トイレに戻ったんだって……」

——小さな声で話す恵子ちゃんの声が暗い視聴覚室に響く。

照明はすべて落とされ、遮光カーテンで日の光を失った視聴覚室はずいぶんと暗く、ふと気を抜くと雰囲気も相まって自分が今右を向いているのか左を向いているのか分からなくなりそうだった。

なんとなく、私にイップスで視覚を奪われた相手のことを思い出したけど……比べるものではないかと首を振る。

室内にある唯一の光源はミチルちゃんが用意してくれた小さなペンライトのみ。それも手元を鈍く薄ぼんやり照らすほのかなもので、非常事態にはあまり役に立ちそうもないけれど怪談をするにはぴったりだった。

ひとり、ふたりと語っていく内容を聞きながら、よく聞く都市伝説だな、と感想を抱く。特別何かを期待したわけではないので不満があるわけではない。むしろ上手くやれるか不安だったので、こんなものでいいのかと安心したのだ。

話の内容は迫力がないけどドキドキと緊張しながら怯えている皆がかわいらしく、つい微笑ましい気持ちになれる。

うん、男たちの野太い悲鳴よりずっといい。

これが俗にいう女子会ってやつなのかもしれない。なんだか妹が増えた気分だ。せっかくだからこの子たちと友達になりたいな。……でも正直、友達ってどうやったら「成る」んだろう。改めて考えたことなかったな。「友達になろう」って言うの？

「ひゃーっ、やっぱ暗いと雰囲気あるよね……じゃあ次、幸村さんね」

「ん？ ああ、私の番だね」

ひとりで考え込みすぎていたようで、ミチルちゃんに声をかけられてハツとする。いつの間にか、最初に「怪談を話すごとにライトを消す」と言われていた通り、恵子ちゃんがライトを消していた。

さて、3番目は私の番。話す怪談はもうすでに決めていた。地方紙にも載ったらしく柳が気にしていて、仁王がネットから拾ってきた話。

仲良くなれるかの瀬戸際だ。ここはひとつ気合を入れて頑張ろう。

「うん、ちょうどいいのがあるよ。ああ、私の体験談じゃなくて、拾った話……そう、『これは友達から聞いたのだけど』ってこと。――

――それじゃあ、『十九地蔵』」

それはとあるふたつの村のお話。語り継がれる奇妙な言い伝え、川へ行ったとある兄弟。

――そして真実は明るみに。

それは染みついた怨恨の業。地蔵がたてられ月日が流れ、隠されていた古い記録しか残らないまになったとしても、消えぬ遺恨は手を伸ばす。この恨みを晴らさずにいられるか、なぜ許せようかと嘆いて呪う。

「ほんとう……恨みなんて買うものじゃあないね。」

――よし。これは、なかなかうまく語れたんじゃないだろうか。

思わず心の中で渾身のドヤ顔を決めてみたところで、三人からのリアクションがないことに気が付いた。暗闇にライトがふたつだけ浮かび、シーンと静まり返っている。

あ、ライト消してない。思い出して自分の分のライトを消せば、息を飲む音が三つ聞こえた。……え？

「う、うつわあああコッワ……いや内容も怖いけど幸村さんの語り方が怖い！ 雰囲気すぎすぎー！」

「す、すごい、背筋がぞわぞわする……」

「あー待って無理怖いって……人に優しく生きていきます……」

大ウケ？ だった。

一瞬安堵のため息を吐きそうになって、ぎりぎり飲み込む。静まり

返った雰囲気にもしかしてスベツたのかと冷や汗が出ていたのはプ
ライドにかけて秘密にしよう。怪談話より怖かった。

「頑張った甲斐があったよ。じゃあミチルちゃん。どうぞ、最後」

「こ、この後に話すのハードル高くない？……んんつ、じゃあえつと、
旧校舎の話にするね」

「旧校舎？旧校舎って、グラウンド横にある、あの半分崩れてる木造の
やつだね。存在は知ってたけど……そんないわく付きだったんだ」

ミチルちゃんが少し青い顔で出した「旧校舎」に、思わず声を出し
てしまった。アレが旧校舎だということは知っていたけど、こんな状
況で名前を聞くとは。先生方から『危ないから近づかないように』と
言われていたのもあって、背景みたいなものだど気にしていなかっ
た。

でも旧校舎って、たしかに怪談話の、特に学校の怪談系では定番か
も？古びた建物なんだから本当に居ようが居まいが噂にはなりそう
だし。あるあるってわけか。

——なんて甘く見ていたこともありました。

旧校舎のいわくは思ったよりヤバかった。家鳴りを足音と勘違い
したり、なんてレベルじゃない。端的に言って死にすぎだ。過去のも
のは知らずとも、去年の事故あたりは進学前に調べていたので知って
いる。真偽不明の中に真実が混ざると信憑性がグツと上がるのか、妙
にうすら寒い気分になった。いったいどうなってるんだ？呪われて
でもいるのだろうか。どういうことだよ蓮二……。

まさか今まで気にしていなかったあの旧校舎は、誘拐自殺死亡事故
……地域では有名な、いろんな意味での事故物件、というものだった
とは。聞いてないぞ蓮二！

「ど、どうだった？」

「……うん、すごく怖かったよ。ミチルちゃん、話すの上手だね」

本当に結構怖かった。

さて、語り終わったミチルちゃんがライトを消せば、この場は本当に闇に飲まれる。真っ暗闇の中から三人の強い緊張が伝わってきて、今日の怪談のメインの時間だと、旧校舎の話でちよつと崩れたメンタルを整えなおした。

始まる前にミチルちゃんから説明されたのは、今回の怪談のメインは話終わった後、ということ。

まず、ひとりひとつライトを持つ。それを怪談を語ったごとに消していく。そしてすべて消えた暗闇で参加者の点呼をとる。——
—そうすると、その場には誰も知らない『誰か』がひとり、増えているらしい。

つまりかの有名な百物語の簡易版だ。いや、本物の百物語は確か『百語れば本物の「怪」が現れる』というものだったはずなので、どちらかというとおマージュ、かな？多分どこかで聞きかじったか信憑性のないネットの記事から拾って来たんだろう。

けれどいいのだ。ここにいる子たちが求めているのは、ほんのちよつとのスリル。ささやかな肝試し。リスクのない非日常。「おもしろかったね」「怖かったね」と笑い合える思い出になればそれでいい。

——話を戻すと、まあつまり、すべてのライトが消えたということは点呼の時間というわけで。

「いち」祐梨ちゃんが言う。点呼の始まりだった。

「…にい」恵子ちゃんが遅れて続く。少し緊張しているらしい。声が強張っている。

「さん」私の番。子供遊びながら雰囲気があるためか、楽しさの中に

混じった恐ろしさでドキドキと心拍数が上がった。何かが起こるとは思っていないけれど、独特の空気感がこの時間を楽しませてくれる。

最後のミチルちゃんはかなり緊張した様子で生唾を飲み込んでいた。ひどく怯えている、というより、最後という緊張と興奮がせめぎ合っている感じかな。つまりはそう、楽しんでる。

震えた唇が最後のカウントを終える。「し」

もちろん何も起こらない――

「い」

「……………え？」

「いやああああアツツ!!!」

――起こらない、はずだろう!?

真つ暗闇に3人分の悲鳴が響く。待て――待て、待て待て待てありえない、4人しかない部屋でどうして5人目が？ミチルちゃんたちのイタズラじゃない。女の子の声じゃない。嘘だろう本当に何かが出たっていうのか？何故、誰？誰が、何で！

混乱する頭の中でかろうじて冷静な部分がある、怯えて飛びついてきた祐梨ちゃんごと左右にいたふたりを引っ張って背中に隠す。手荒になっちゃったせいでガタガタと机にぶつかった音がしたけど許し

てほしい。だって声は私の正面から聞こえてきたから。

点呼を取っていた時とは比べものにならないくらい心拍数が上がり息が荒くなる。3人の悲鳴と暗さで相手の動向がつかめなくて、必死に意識を研ぎ澄ませる。

試合中は声援だって気にならない。なら大丈夫だと自分に言い聞かせて、この間およそ3秒。冷や汗が垂れる中、必死に冷静な思考力をかき集め気配を感じる方を睨み付ければ、その気配が少し揺れ――

「っうわ、」

部屋が一気に明るくなった。

それは消していた部屋の照明だ。暗闇に慣れ切っていた眼には眩しすぎて、とっさに目をつむって……うん？

待てよ、何か……おぼけが、自分で明かりをつけたってこと？

沸いた疑問に、まだ明るさに慣れない目を無理やり開いて照明スイッチのある出入口へ視線を向ければ、そこには同じ年くらいの男の子がスイッチに手をかけながらこつちを向いて立っていた。

……足、あるよなあ。



男の子は黒髪、真っ白な肌、真っ黒なスーツでシャツまで黒い、という重たくて浮世離れた風貌だったが、どこからどう見ても生きている人間、に思えた。そうにしか見えない。

「…失礼。今最後に『ぶ』って言ったのは、あなたですか？」

「そう。…悪かった？」

いまだ混乱している3人を庇いながら一応確認してみれば、男の子

はそつけない表情と悪気のなさそうな声で肯定する。4人分の悲鳴を背負ったとは思えないしらぬ顔である。

ああうん、悪くはないけど、いや、正直悪い、と言ってやりたくないくらいのををされたのだけれど……趣味は悪いな、と幸村は思わずため息を吐いた。

「なーんだあ！腰が抜けるかと思ったあ」

「あ、みんなごめんねいきなり引っ張って……机にぶつけたよね？痛くない？」

「あつ！ううん、大丈夫！」

「うん、庇ってくれてありがとう……」

「心臓は止まるかと思ったけど……」

吐き出すように大きな声を出したミチルちゃんにハツとして手荒な真似をしたことを謝れば、3人も優しく許してくれた。よかった……。

ただ、流石に、というか思わずため息を吐いた祐梨ちゃんのセリフに、男の子は反応したらしい。

「驚かせて申し訳ない。明かりがないんで誰もいないと思ったんだ。そしたら声がしたから、つい……」

「えっ、そんなあ！いいんです♡転校生ですか？」

謝罪を向けられた祐梨ちゃんは改めて男の子の顔を認識して、一気に回復したらしい。確かに彼の顔はとも整っていて、そんな異性がら優しいな薄微笑みを向けられたとあれば、彼女たちが浮足立つのも分からなくはない。

——いやでも、みんなすごいな。祐梨ちゃんだけじゃなくて他ふたりもうっとりした顔になっている。特に祐梨ちゃんとミチルちゃんはさつきまで怯えていたのになんか、目が……虎視眈々って感じになって……チャンス逃さない感じ。

怪談話より謎の美形の方が、よっぽど魅力的な非日常、か。まあ怯えてすり減った精神を回復できたみたいだからまだいいのかもしれない。少なくとも、泣きっ面に蜂になるよりは。

「え〜♡何年生ですかあ?」

「……今年で17」

「じゃ、あたしたちより1年生先輩ですね!」

いつの間にかミチルちゃんが会話に混ざり、はしやぐふたりの質問に答える男の子は一見温和そうに受け答えをしている。

「こんなところで、君たちは何を?」

「あたしたち怪談してたんです!怖い話!」

「ふうん……仲間に入れてもらえるかな」

祐梨ちゃんは嬉しそうに快諾した。だろうね。

渋谷、と名乗った男の子の様子見をしていた恵子ちゃんも「渋谷先輩も、怪談好きなんですか?」と話しかけにいく。それに対して彼が「……まあ」と微笑めば、黄色い悲鳴が追加で上がった。

——うん、うん。なるほど。

「……渋谷さん、そういうえば、わざわざ視聴覚室までいったい何のご用事だったんです?」

「……ああ。少し、……テープのダビングをしたかったんだ」

3人はきやつきやと手伝いを申し出るが渋谷さんは当たり障りなく断り、それより怪談をしてほしいと言うので、ミチルちゃんが「それなら……」と席に着こうとした。が、それをストップさせてもらった。

「うーん、楽しそうなところ申し訳ないけど、そろそろ帰らないと先生

に怒られるんじゃないかな」

「えっもうそんな時間!?!」

「うっそお」

「ほんとか、あ、あのうセンパイ……」

時計を確認してもらえば、すでに怪談を始めて1時間ほど経過したことが分かる。さすがにちゃんとした理由もなく下校時間後に長居しすぎるのは許されないだろう。こちら辺が最終ラインだ。

シヨックを受けた顔をした3人はしかしめげずに、代わりに明日の放課後に約束を取り付けていた。すごいな。

渋谷さんは本来の用事を済ませるためにこのまま視聴覚室に残るそうなので、私たちは廊下に出る。といっても3人はそのまま玄関に向かい、私は職員室に向かうのでその場でさらに別れるのだが。

——ああ、そうだ。

「渋谷さん。まだ校内に残るなら来校者カードを貰って付けていた方がいいですよ」

そしたら私もここまで悩まなくて済むので。



渋谷は、ひとりだけ違う方向に向かって行った少女を見送った後、また近くでこちらをうかがっていた他の3人に近づいた。

「……ねえ、彼女は?」

「へ?ああ、幸村さんですか?」

「へえ、幸村さんって言うんだ。」

さきほどより少しぶっきらぼうになった渋谷に、しかし気にした様子もなく答えたのは恵子。そして渋谷の反応にハツとした顔をした

のはミチルと祐梨である。

「……あのお、もしかして、幸村さんのこと気になります?」

「……ああ、そうだね。少し気になるかな」

探りを入れるようなミチルの問いかけに、渋谷は気づいていないのか幸村が去って行った方へ視線を向けたまま答える。

その答えに3人はパツと顔を見合わせた。

「イケメンと美人とか最高じゃん」

「ひゃーっ美形カップル?」

「えーっ、す、すごい、ドラマみたい!」

「あのっ私たち応援します!!」

「え?」

「幸村さんって幸村聖子せいこさんって言うんですけど!」

「頭良いし運動できるし、美人だし優しいし!」

「えーっとえーっど、あつ、あとバイト探してるって言っていました!」

「二 絶対いいと思います!!」

「あ、ああ、そう。ありがとう。」

「はい!!」

「また明日! 明日もちちゃんと幸村さん誘いますから!!」

考え込むように思考を飛ばしていた渋谷は、いきなり爆発したようにテンションを上げた女子高生3人組に思わず怯む。

渋谷が幸村を気にしているのは、彼女がずっと渋谷のことを警戒していたからなのだが、そんなことを知らない女子高生の思考は少女コミックれんあ方面へ飛んでしまった。

次々に幸村の情報を押し付け、謎の応援をして去っていった3人に、渋谷は思わず呆然とした表情で黙り込む。なんだったんだ、いたい。

——最初に感じた違和感は、浮かべている微笑みが張り付けたようですら寒いな、と感じたこと。

転校生かと聞かれて「そんなもの」と濁し、学年を聞かれて「今年で17」と歳を答えるという妙な曖昧さ。

学校なのに制服を着ていなくて、スーツを着ているが教師ではない。年齢を考えれば教育実習生ではなく、なのに転校生でもない。

そんな人がなぜ校内にいるのか、疑問に思うのは当然だろう。

無理やり考えれば先生や生徒の関係者、という可能性もあるが、それでもダビングのために視聴覚室へひとりで来ているのは変だ。多分あれは嘘。

何より変だったのは、怪談に参加したがったこと。——だって彼、祐梨ちゃんたちに話しかけられるのを面倒くさがっていたのに。

張り付けた微笑みは適当に誤魔化して躲すため。一見温和そうに対応していたがよく聞けば返答自体は淡白だ。悪人が猫をかぶっているというより、人付き合いを好んでしないタイプが無理をしているように感じたのはあながち外れていないと思う。

そんな人がわざわざ怪談に参加を？まあ怪談に参加したい理由なんて聞きたい、あるいは話したい以外に思い付かないので、無理しても参加したいくらいに怪談が大好き、という可能性はなくもないが。

本当の目的のために私たち、あるいはこの学校の生徒と親交を深める必要があつて、怪談参加はその口実……とかだともう分らなくなる。

しかし不審者にお熱な3人をひとりですらなくちやいけない状況じゃ思考を止めるわけにはいかず。

あそこで私が「怪しい」と言っても受け入れてもらえなさそうなところが厄介だったなあ。多分あの状態の女子高生にはパッションで

負けるもの。

だから観察して、考えて、考えて、警戒した。

なんとなく推察できる性格的に、多分素は不愛想な人っぽかったから、微笑みは処世術、ぼかした物言いは会話が広がるのを面倒くさがっただけ……といえれば違和感はない。

けれど、登場時のおちやめとなぜか積極的に怪談に参加したがる謎がノイズで結論を出せない。

これで渋谷さんが普通の男子高校生ならナンパの口実かな？って思えるのに、そうじゃないから面倒だ。実はすました顔の下ではしゃいでたりしないかな。あるいは何も考えてなさそうな無責任っぽさがあれば好奇心なだけかなと警戒値を下げられるのに、どう見たって真逆だし。

個人の感想として悪い人ではなさそうだ、とは思ったものの、不審者ポイントが高すぎて困る。だから1回渋谷さんから離れて先生に確認するのが最善だろうと判断した。最低限素性さえ分かれば何か分かるかもしれないし、それでもそもそも先生も知らない人だったなら校内に侵入した不審者として先生に対応してもらえばいい。

だから第2ラウンドを始めようとしていた空気に水を差して、解散を促した。時間が時間だったのは事実だから違和感もなかっただろう。だってまだ渋谷さんがどこまで安全か確信が持てない状況で、3人と彼を残して離脱するわけにはいかなかったし。かといって追いかけてきて危害を加えてくっぽくもなかったから、3人とはすぐ解散したけれど。

あーあ、せつかくミチルちゃんたちともっと仲良くなれると思ったに、とんだイレギュラーだったよ。

「失礼します、1年F組の幸村聖子です」

ガタンゴトンと電車に揺られ、ほんのちよつと寄り道をした先にた

どり着いた居候先。

石造りの階段を登れば、大きなお寺の全貌が見えてくる。少し遅くなったなど考えていけば、入り口、門の前に人影がひとつあることに気づいた。

「——遅かったじゃん」

「おや、と少し驚く。門の前に居たのは居候先の家主の息子——
——越前リョーマだった。」

時計を見てみると、確かに普段より一時間半ほど遅い帰宅になったけど、家主でありリョーマの父である南次郎には連絡を入れているし、そもそもまだ日の落ちる前なので、咎められるほどではない。というか、

「逆に、君はずいぶん早いじゃないか、ボウヤ」

まだ部活をやっている時間帯だろうに、なぜこの子がもう家に帰っているのか。この子に限ってテニスをサボるということは多分ないだろうけど……というか、リョーマはテニスウェアを着ていて、ラケットもある。完全にテニスをする準備がバツチリ、といった感じだった。

その格好に加えて、先のセリフ。今日は何か約束をしていたつけど幸村は少し悩んだが。私がテニス関連の約束を忘れるだろうか。

ラケットを、トントンと肩にあてながら、ふくれっ面のリョーマが話す。

「今日、コート整備で部活なかったから。どうせならさっさと帰ってあんたと昨日の試合の続きしようと思ったのに、あんた全然帰ってこないし。親父に聞いたら遅くなるって連絡来たっていうし。正確な時間は分からないって言うから出かけたら入違いそうでどこにも行けないし。何のために早く帰ってきたのさ。最悪。」

「…………ふ、ふふふ、」

「…………なに笑ってんの」

なんと、まあ。この王子様は勝手に決めて勝手に怒っていただけらしい。

ここまで自己中なふくれっ面をさらされると…これだから東の生意気ルーキー君は、と思わず笑いがこぼれてしまう。

——ねえ君、そんなに私とのテニスが楽しみだったの。

「それは悪かったよ。実は今日は、クラスの子が誘ってくれて怖い話を一緒にしてきたんだ。案外面白かったよ。」

「へえ、アンタも意外とそーゆーのやるんだ」

「いつも思うんだけど、君や周りの彼らは私のことを何だと思ってるのかな」

演技でもなく心底意外だ、という顔をされればさすがの幸村もムツとする。

まったく、女の子ひとり捕まえてやれ魔王だなんだと言っているのを実は知っているんだぞ、と言ってやれば彼らはどんな顔をするだろうか。君たちのところの不二ならともかく、私はあんまりそんな要素ないだろう。

「私だってただの女の子らしく女子会に興じることだってあるさ」と（まあ怪談が女子会に分類されるかは微妙だけど）幸村が言えば、キョトンとしていたリョーマの顔がイタズラっぽい笑顔に変わった。

「ふうん、じゃあ『女の子らしく』怖がりしたりしたの？」

「怖がるに男も女もないだろう。……まあどうだったかは、君の目で確認してもらおうかな？」

私をからかうなんて10年早い、と幸村がカバンから某レンタルショップのロゴが入ったケースを出せば、会話の流れから中身が何か

は察したのだろう。リョーマの顔が渋柿を食べたように苦いものになる。

「——もちろん、テニスの後にね」

ただしそれは、それよりテニスがしたいという意味表示だということとは知っているの。

■
テニスでかいた汗を流して夕飯もろもろを済ませ、集合したのは私の部屋。流石に居候の身で夜遅くにリビングのテレビを拝借するのははばかれたので、使うのは幸村の私物のノートパソコンである。ちなみに『居候云々』については南次郎さんたちから「気にするな」とは言われているものの、まあ気になるものは仕方ない。そんな幸村をリョーマは「アタマ固^かった」と呆れたように見たため、頬をつねられた。

「ボウヤ、怖くなったら縋り付いてきてもいいよ。抱きしめてあげようか」
「冗談」

そういえばこの子はアメリカ育ちらしいけど、日本のホラーに耐性はあるのかな。ふと幸村は、ホラーのタイプが違いすぎて怖がられる、という話を聞いたことがあったような気がして少し心配になった。でも怯えてるこの子とか面白そうだから見てみたいかもしれない。

まあとは思っても、リョーマは気負いない様子で幸村の横に座ったので、案外平気なのかな？と気にしないことにした。

■

——平気じゃなかったらしい。

ふたりの目の前では日本ホラーらしいにじり寄る恐怖が再生されている。流石大ヒットホラー作品。かなりの恐怖だ。

幸村が横に視線を向ければ、少し青ざめた顔のリョーマが頬をひきつらせて固まっていた。……やっぱり日本製はちよつと辛いらしかった。肝試しとかは平気そうだったのになあ。

正直怯えてると気づいた当初は「いつまで強がりが続くかな」みたいなイタズラ心があつた幸村だったが、ここまで必死にこらえられると、ちよつとかわいそうというか、心配というか。だつてまったく、私が虐めているみたいじゃないか。

なんでこう、私の周りには手のかかる子が多いかなあ。

「ボウヤ」

「！……なに、幸村サン。もしかして怖くなっちゃった？」

「——ああ、そうだね、実は少し」

「はっ」

強がる軽口に便乗してやれば、とんだ間抜け面に。数時間前に門前で見た顔だった。幸村は追及することなく、冷えないようにと羽織っていたブランケットの片側、リョーマの方を広げてみせる。

「少し怖くて、ちよつと寒いんだ。君が良ければこつちに来てくれな
いか」

「……………まあ、それくらいなら、別に？」

もにもと言いなながら、もそもそと入ってきたリョーマの肩を抱くようにブランケットを羽織りなおして、ふたりは再び画面に目を戻す。幸村は、なんだかんだ言ってもナマイキで手のかかるところって可愛くて仕方なかったりしちゃうんだよなあ、とこっさり考えた。

画面の中で女性が悲鳴を上げる。隣のボウヤとの距離が少し縮ま

る。

「うーん。実はこういうのを見るの、久しぶりなんだよね」
「へえ」

ぽつりとつぶやいた幸村への返答はそつけない。まあ特に意味のある呟きじゃなかったけどさ。

——実を言うと、幸村の言った「怖い」というのはまんざら嘘ではない。幸村だって人並みにこういった類のものに恐怖を感じたりするのだ。……いや、他人よりも少し、怖がりかもしれない。ただ、立海では主に赤也が、ここではリョーマが、幸村より怯えているから逆に冷静になれるだけで。あと、あんまり人に弱点になるようなところを見せたくないから素知らぬ顔を試してみたりしているだけで。

怖がりなのを知られるのは別にいい。ただ、怖がっているところを見られるのは嫌なのだ。さらに言えば、それに対して過剰に気を使われるのも好きじゃない。めんどくさいと言われればその通りなのだが、まあ幸村にもプライドがあるので。

今日の怪談も、女子高生のオアソビ程度だったから余裕があった。もし本格的なものだったらダメだっただろう。だから渋谷が来たときは、流石の流石に心臓が止まるかと思った。

隣の温かい塊をもう一度見やる。まだ顔は青いけど、さっきよりは平気そう。

視線は画面のまま、幸村は少し体重をかけて隣に寄りかかる。視線を感じたけど、気づかないふり。

「……で？　久しぶりのホラーの感想は？」

気を紛らわせるためかなんなのか、時間差で話に乗ってきたリョーマ。それにただ、一言だけ返す。

「君とテニスがしたくなった」

ねえ、君もそうだと言つてよ越前リョーマ。



すつぽり、片腕に収まる小さな熱源。さつきまで、ネットを挟んで戦っていた相手。

暖かい。……生きてる。

そう、唐突に思った。

「——小さな体だ。成長期に入ったのか、初めて会った時より背は大きくなっているけれど、それでも私より20センチ前後は小さくて細い。」

この小さい体が、私のテニスを打ち破つたのだと噛み締める。

熱い体だ。ポカポカとしていて、春の芽吹きを与えてくれるような、夏の刺す日差しのような温かさを、この体は持っている。

——君は私の何だろうか。

あの時感じたのは苛立ちだった。そして恐怖だった。けれどうつくしかった。

この子のテニスはうつくしい。うつくしい、人を魅了するプレーだ。

人を惹きつけてやまない、自由で、どこまでも自分に正直なテニス。テニスの王子様。誰もが目を離せない。

うつくしい、いのちだ。この子のいのちは、こんなにも尊くて、うつくしい。

——誰にも言ったことはないけれど。私が神の子と呼ばれるのなら、あの試合で、この子はきつと、私の天使だった。

負けた屈辱。忘れていない。たくさんの負の感情があった。でも、燃えるような炎があった。

愛していたはずのものを魅せつけられた。

目が離せない、輝きを知った。

もう一度体重をかけなおす。じっと見つめてくる視線はまた無視した。ゆっくりと瞼を落として、静かに、息を吐くように話しかける。

「…せめて今度は、プロの試合映像とかを借りてくるよ。ネットで探してもいい。ねえ、テニスを見よう」

ホラーを見るのもなかなか楽しいけど、やっぱり私たちの間にはテニスがある方がずっと『らしい』と思うんだ。

この子といると、血が騒ぐ。『テニスがしたい』と本能が訴えてくる。

それなのに、なんだか、とても穏やかな気分になるときがある。

テニスという、私とボウヤの一本のつながりが生み出すこの空気が、私は存外好きだった。

だから、やっぱりテニスを見よう。テニスをしよう。多分私たちの関係は、そっちの方がずっと生きてるって感じがするんだ。………なんてね。



そつと体重をかけてくる幸村サンの顔をのぞいてみる。瞳は閉じられていて、長いまつげが影を作っていた。

顔だけ見ればどつかのおとき話に幸薄いオヒメサマとして出てくるような美貌つくりのくせに、中身はてんでちぐはぐだ。強くて、したたか、強引で、いじわる。あと、たぶん、でも、きつと——うつくしい。

幸村聖子の存在を初めて知った時、こんな人が恐れられているのかと拍子抜けした記憶がある。だってまるで強そうに見えない。細いし、女の子らしい女の子って感じだったから。立海の人たちがいつも守るようにそばに居たから余計かも。

でも、対峙すれば分かる——彼女がなぜ恐れられるのかを。風いであるようで、ゾツとするほど煮えたぎる、蹂躪者の目。

本能がヒエラルキーを理解した。それでも負けるつもりなんてさらさら無かった。

けど実際試合をすれば、強いなんてもんじやない。あれは恐怖……いや、畏怖ってやつかな。入ってはいけない領域に足を踏み入れた感覚。絶対的で神々しい『最悪』^{ナニカ}の縄張りに踏み入ってしまったような絶望感。

——誰にも言っていないことだけど。

うつくしい、と思った。

『神の子』なんて御大層な名前で呼ばれる理由がよく分かった。あの人のテニスは、膝をつきたくなるような威圧感があつて、許しを請いたくなるような絶対感があつて、何より——うつくしいから。

だからあんな恐ろしいのに、みんな、どこか尊いものを見るような色をもつてあの人を見る。あんまりにもうつくしいから。

だから残念だった。この人が笑っていないのが、残念だった。この人が楽しんでいないのが、たまらなく残念だった。

こんなにうつくしいんだから。もつと、楽しめばいいのに。楽しそうに、笑つてテニスをすればいいのに。きつとこの人なら、がむしやらにボールを追いかけて泥だらけになっても『楽しくてたまらない』って顔で笑っていれば、きつとどんなものよりも、うつくしいと思うのに。

「次はテニスを見よう」と幸村サンは言う。

この人は、たぶん無自覚だけど、たまにこうして俺とテニス以外のものを共有しようとしているんだと思う。そのくせ、言い出しつpegがないと生きていけない人だもん。

「いいよ。俺もそっちの方がいいし」

うつくしいひとだ。この人は、いじわるだったり怖かったりするけど、こころも、いのちさえもうつくしい人だ。

ヒトの体に体重を乗せてくる幸村サンに、こっちからも体重をかけてみる。この人の体温は俺より少し低い。乾先輩がこの人が入院していたと言っていたのを思い出した。そして、その治療の仕上げのためにあんなに大切にしていた立海から出てきたことも思い出した。

このぬるさがあの人のおちの残りのような感じがして、バカみたいだと分かっているのに不安になった。俺の体温が移ればいいのにともう少し体重をかけることで、感じた恐怖を押し付ける。

こんなに儂い。こんなに消えてしまえそう。なのに、テニスをするときにはあんなに眩しくて力強い。

例えば俺への敗北。例えば合宿での試合。例えばドイツ戦でのダブルス。大会後の幸村サンは少しずつ変わってきたように見える。それとも、元のありのままの姿に戻って行っているのかな。

どんな理由でもいいけど、ただ、この人はテニスを楽しんでいる姿を見せるようになった。

ネットを挟んでそれを見かける度に、目の前に火花が散ったみたいに見界がちかちかする。あまりの眩しさに目がくらむ。

この人は俺のテニスを、『人を惹きつけるテニス』だと言う。でも、この人の方がよっぽどだと思う。この人が『楽しくてたまらない』って顔でずっとテニスをするようになったら、たぶん俺より100倍くらい厄介だ。

テニスを楽しんでいないと言っていたあの試合の時はもうすでに、それでもうつくしかかった。

ならきつと、この人が『幸せで楽しくてたまらない』って笑ってテニスをする姿は、世界で一番くらいうつくしくて、みんな目が離せなくなると思う。

—— うつくしい人だ。うつくしい、いのちだ。

こんなうつくしい人に初めて勝ったのは俺なんだから、このうつくしい人が一番うつくしくなった姿を始めて見るのも俺でいいはずじゃん。そのために、見つけたこの人をウチに引っ張りこんだんだか

ら。

立海の人たちや、仲良くしているらしい部長たちとか、わりと懐かれてるっぽい徳川さんとか、いろんな人がいるけどこれは譲れないよね。

ウトウトとしてきた意識のまま幸村サンによしかかれば、寝るのと声が降ってくる。いつの間にかホラー映画は気にもならなくなっていた。

部屋に、と言ってくるこの人に、ここで寝ると言ってもやれば、苦笑いしたような息遣いが聞こえてくる。

この人が、俺みたいなのがままに実は案外優しいと最近気づいた。ストイックで厳しい癖に、なんだかんだ言っても甘やかしてくれるところがある。

ちろ、と一瞬だけその困ったような顔を盗み見て、そのまま睡魔に任せることにした。きつと、「さて、どうしたものか」って困ったような顔をするだろう。

それでいい。俺は、このうつくしい人を困らせるのも実はちよつと好きだったりするから。

晴れのち下駄箱（VS 神の子）

さて、晴ればれとした朝が来た。

結局ボウヤは私にもたれかかったまま熟睡。しかしさすがの私も年頃の少年と添い寝をするわけにはいかないのも、もちろん部屋にお帰りいただいた。

お休みボウヤは丁寧に部屋に送り届けたとも——お姫様抱っこで。

悪意？ 無いとも。なにせボウヤは現役スポーツ選手といえるのだから、そんな彼の健康を気遣うのは当然のこと。最大の注意を払った結果がお姫様抱っこだっただけだよ。朝食の沢庵に誓って本当だとも。（別に沢庵が特別好きなわけではないけれど）

だから、その姿でボウヤのお父さんである南次郎さんに遭遇したのは全くもって偶然で、爆笑しながらカメラを構える南次郎さんの前を通る時だけ移動スピードがスローだったのはほら、ぶつかったりしないように気を使っただけだし。

——以上が、ボウヤの熱い視線を受ける朝食会場での私の説明である。

「…なんで笑ってるの」

「いや？ 別に？ 何も？」

「……………朝、親父にめっちゃ笑われたんだけど。」

「早朝の親子コミュニケーションか。仲がよろしいようで大変結構じゃないか」

「……………俺許してないから」

「おや、ご立腹かいボウヤ。そんなに私と添い寝がしたかったかな？」
「ちがつ…違うってわかってて言ってるデシヨ、それ！」

ぽこぽこご立腹の王子様を置き去りに、ごちそうさまを言う。そ

うすればボウヤも「つやべ、」と慌てて朝食をかき込みはじめた。うんうん、のんびりしてたら朝練に遅刻する時間だからね。

「それじゃあボウヤ、私は先に行くよ」

「……幸村サン、毎朝4時に起きてトレーニングしてんでしょ？ 何で俺より元気なの」

「トレーニングしてるから元気なんだよ」

腑に落ちない納得いかない、という熱い視線を背に、朝食の食器を片付けてきつきと居候先から出る。

正直、こんな朝早くに出ても学校に着く時間が早すぎて暇なんだけど、ボウヤに合わせているから仕方が無い。なにせ、居候を知った手塚と不二から直々に、赤也みたいに朝練に元気に遅刻するボウヤをきっちり起こして登校させるといふ役職を与えられてしまったのだから。

ふたりがかりで頭を下げられれば、もともと越前家に居候の恩がある私が断りきれぬ筈が無い。自分たちだって他校生である白石に赤也のお守りを……いや、別にお守りってわけでも……お守りだなあ。

まあつまり、自分たちは任せといて、いざ自分たちが任せられたとき拒否するのは道理にあらず、ということだ。

それに、このミッションを私が肩代わりすることで大学生の奈々子さんや凜子さんがのんびりとした朝の時間を過ごせるわけだ。朝4時に起きてトレーニングをしてボウヤを起こして、ふたりで雑巾がけをして汗を流して朝食準備。なかなか詰め込んだスケジュールになるけど無理をしているわけでもないし、働かざるもの食うべからずだ。

奈々子さんと凜子さんには少し申し訳なさそうな顔をされてしまったけど、まあ、花嫁修業ということだ、と言えば、ようやく笑ってくれた。

それに、これは私にとって莫大なメリットがある。朝、運が良ければ——あのサムライ南次郎とゲームをすることができなのだ。あの人の気が向いたときだけ、誰にも邪魔されることなく、あの、到底現役を退いたと思えないような鋭いショットと戦うことができる。あらゆる苦労におつりがくる幸運だ。



——そういえば、そろそろ委員会決めがあるころかな。美化委員にするつもりだけど、確か中庭にあった空っぽの花壇は使わせてもらえないだろうか。

ゆつくり歩いた通学路。気分よく今後のことを考え校庭に差し掛かったとき、ふと、桃色がよぎる。思わず顔を上げれば、満開の桜並木が視界を覆いつくした。

(うん、絶景。……ふふ、独り占めだ)

やっぱり早起きってお得だな、とこの贅沢な時間を堪能する。こここの桜はまだ若いらしく木の幹も細めだが、咲く桜の美しさは十分なものだ。

惜しいな、この風景をキャンバスに乗せたかった。学校じゃなかったら画材を取りに帰ったのに。

せめて目に焼き付けようとじつくり眺めていけば——ふと、咲き誇る桜の陰に不穏を感じた。ぱちり、瞬きひとつ。

春爛漫と言わんばかりの桜並木。風に踊る薄桃色が風流を感じさせる中に、『それ』はある。

『それ』は屋根だった。古びた大きな木造建築——旧校舎だ。

グルン、と昨日の記憶がめぐり始める。潜められた声。暗い室内。

ゆっくりと紡がれる噂話。『自殺』『誘拐』『事故』『死亡』『死亡』『死亡』

—— 気づけば、目の前に旧校舎があつた。

「…いや、うん。仕方ないよね。」

うん、楽しそうだなって少しでも思ったら、うっかり近づいて覗くのは仕方ないよね。

『不謹慎』『警戒心がない』なんて言われかねないかもだけど、あいに幽霊どころか心霊現象の類にすら出会ったことのない人生を送ってたんだ。『不謹慎』は何も言い返せないけど、正直『脅かし役のないお化け屋敷』みたいな印象しかもてないこの状況。警戒すべき事なんて『ささくれが刺さんないように』、くらいしか思いつかないし。あああと、『建物が倒壊しませんように』？

いちおう、近づかないように学校側から言われているから中には入らないけど、内部進学組じゃない私が旧校舎に近づいても『すみません、前の学校は旧校舎がなかったから気になって…』とでも言えば特に責められることもないはず。

誰に言うわけでもないような言い訳をして、その全貌を眺める。

ずいぶんと古い校舎はどことなく趣を感じさせ、同じようにいつ壊れるかと冷や冷やさせる危うさがある。桜並木の間から覗くだけでどことなく異世界感を出すのだから、夜になれば不気味以外の何物でもないのだろう。何もなくても『いわく』が付きそうだ。

—— じつと見ていると、ふと何か違和感を感じた。…：なんだろう。それが何なのか気付けない。首をひねって考え込んでしまう。違和感があるのだ。でもわからない。ちよつとイラつとしてしまふ。

どこだ、なんだ。くるくると視線を移動させていると、
玄関に何かを捉えた。

「うん……？」

遠目ではよく見えないけど、暗い玄関のど真ん中に何かがあるように見える。

腕時計を確認してみる。——チャイムが鳴るまで、まだ時間は十分にある。



更に玄関へ距離を詰め、すすけて曇ったガラス越しに覗いてみる。
なるほど、モノは黒くて、角ばっていて、

「これって……カメラ、ラ？」

しかもテレビ局とかにあるようなご立派な奴がこっちにお尻を向けて設置されている。

——というかこのカメラも気になるけど、すぐそこに止められている真っ黒なバンも気になる。不用心にもドアが開けっぱなしになってて、中に積んであるたくさんの機械類が見えている。……たぶんこの、玄関のカメラと関係するものだろう。

でも、なんでカメラなんてものが？　なんで、旧校舎で撮影を？

(……渋谷さん？)

——それは勘だ。

けれど、偶然とは思えない。

旧校舎の噂と、自称転校生と、カメラ。…テレビ局？ いや、でもカメラにも車にも局のステッカーや目印つばいものは見えない。たまたま？ 私用？ 私用で、あんなカメラを？ 機材だっておもちやには見えない。

(入るつもりは、なかったんだけどな)

「ん？ え、うっわ……」

ギツ、と押せば簡単に開いた扉に、嫌な予感がよぎり思わず鍵穴を覗き込む。

……古びて錆びてはいるが、無理やり開けられた形跡はない。ピツキングには詳しくないけど、針金の跡みたいなものもないから、その線もない、かな？ こじ開けられたわけではないということは分かって一安心したけど、つまりは鍵を使ったのか、そもそも鍵がかかっていなかったのか。

とりあえず、カメラに局名なんかを書いてないかだけ見てみよう。あつたらあつたで、なくても、一応先生に話しておくべきだろう。盗撮、なんて可能性がある。

できるだけ音を立てずに、カメラに近づく。それでも建物は古いから歩くだけでギシギシと音が鳴る。うーん、早めに撤退したいな。カメラがお尻を向けているから映像に映っていないのが救い…いやでも音は入っちゃってるか。家鳴り家鳴り。勘違いしてくれませうように。

クルリとひと通りカメラを見てみても、局名なんかは書いていない。しかし気づいたことがひとつ。

「これ……ドイツ語？ このレンズは『S W I S S M A D E』…スイス製」

かなり値が張るんじゃないか、これ。……まさか、金持ちの道楽か。

「誰だ!!」

ビクリ、と一瞬身がこわばる。——しまった、気づかれた。気づかれたし、気づかなかった。

注意力が散漫になっていたのかもしれない。考えてみれば、鍵が開いていたのだから中に人がいてもおかしくない。迂闊だった。油断だった。非日常に、浮足立っていた。

できるだけ焦りを悟られないように緩やかに声がした方に視線を向ければ、身長の高い美丈夫が奥のドアから玄関に出てきたところだった。

……意外。実はもうちよつと危なそうに崩れた人（失礼は承知だけど）が出てくるかと思ってたから、意外な顔面偏差値にびっくりした。しかもスーツ。え？ 結婚詐欺師？ …いや、まだ危ない人と決まってたわけじゃない。そうだよ、もしかしたら渋谷さんも関係者かもしれないんだし、そう考えれば全体的な偏差値が高くても違和感は……いや、そんなことを考えている暇はない。

歩いてくる美丈夫さん。

その表情は、怒り、というより不快感を露にしている、身長と合わせつつそれなりの迫力がある。……でも、雰囲気なら真田の方が老けてて怖いかな、と一瞬くだらないことを思った。張り合うところじゃなかった。

それにしても——『むかつく』『気分が悪い』『邪魔』『不愉快』……そんな感情が伝わってきそうな表情だ。

（……これ、ちよつとヤバい状況、かな？）

現状を前に思考が回る。——さて。この距離と、この体格差。いくら私の身体能力をもってしても、逃げてでも逃げ切るのは至難の業かもしれない。相手も相当こちらを警戒しているのだからなおさらだ。無駄なことをしてさらに警戒されたくない。

けれど不審者（仮）と同じ空間にずっといるつもりはないから、とりあえず——逃げよう。



——あともう少し、お互いの顔がはつきり見えるか見えないかまで近づいて来られたら、先手必勝。のんきに挨拶をして、そうすれば、上手くいけば相手は拍子抜けするはず。まああの様子だと逆上される可能性の方が高いかもしれないけど……そうになったらそうなたで、冷静じゃない相手の動きは単調で分かりやすくなるからメリツトがある。

手を考えながら、つかつかと歩いてくるその人に合わせて屈んでいた状態から下駄箱に手をかけて体を起こした瞬間——不意に、その重みに耐えきれないかのようにぐらりと下駄箱が揺れた。

「な」「え」

そのまま、ゆつくりと倒れだす私の真横の下駄箱。嘘だろう、この程度で？ 無駄に大きいくせに変に細いからバランスが悪いのか。倒れてくる下駄箱を前に、『これじゃまるで私の体重が重かったみたいじゃないか』と場にそぐわない不満を抱いてしまう。

そして、視界の端、少し先の美丈夫さんがハツとした顔で私に手を伸ばそうとするのが見えた。

（ああ、この人多分いい人だな）

直感したと同時に――伸ばされた手が届くより早く――
――反射的な動作で両手をうんと伸ばして、倒れてきた下駄箱を受け止めた。

ズンツ!!

――腕を通してのしかかってくる重み。見た目に対して思ったより重い……木製だからかな。ずっしりとしていて……けれど、タイミングを合わせて膝をバネのように弾ませたおかげで、衝撃を受け流すことと、押し掛かる重みに耐えられる姿勢づくりをこなせた。よし、体にダメージは特にないな、と自己満足。

……その代わり、埃が舞って気分が悪いけど。

(最悪だ、髪の毛に埃が絡んだじゃないか)

癬っ毛だから取り除くのは大変なのに。

美丈夫さんはポカンとした顔で現状を眺め、それから近づいて来ようとした。

「あ、待って、来ないでください。まだ他のが倒れてくるかもしれないので」

「……………そのまま、下駄箱を支え続けるつもりですか」

「――リン、どうした」

さすがにさっきの今だと危ないと、思わず静止の声をかければ返ってきたのは皮肉気な声。でも内容的に手伝ってくれようとしたのだろう。さっきといい、今といい、やっぱりこの人いい人じゃないかな、

と思ったところで、聞き覚えのある声が増えた。

——間違いはない、渋谷さんだ。



「……なんだこの状況は」

「ナル、すみません。……いえ、私にも、……」

渋谷さんの少し動揺したような声が聞こえる。けど、その姿は私の方からは美丈夫さん……リンさん？ に隠れて見えない。

にしても：ナル？ 渋谷じゃなくて？ 何となく、リンさんのセリフに首をかしげる。下の名前のニツクネーム、とか？ ふたりは気易い仲なのかもしれない。

そんなことを考えながら下駄箱を支えている腕と腹筋と足にグツとちからを込めて踏ん張り、傾いている下駄箱をもとに戻せば、『ズン』というか『ドン』というか、とりあえず重たいものが地面に落ちる音が鳴る。それにこっちを見ていた二人ともが大きく瞬きをしたのが見えた。

まあ、このサイズの下駄箱なら大体80kg前後だ。それを女の子が動かしてたら異様に映るかもしれない。……といっても、持ち上げたわけじゃないからそこまで重みがかかったわけじゃないので、実際はそこまで驚かれるほどじゃないんだけどな。

「君は……」

「昨日ぶりですね、渋谷さん。こんにちは」

「……ああ、こんにちはわ」

どうやら渋谷さん側からもあまりこちらが見えていなかったのか、横にずれてこちらを視界に収めた渋谷さんに、何事もなかったように挨拶をすれば、数回瞬きしたのち同じように返事を返された。あ

ちや、冷静になるの早いなあ。『じゃあこれで』って逃げられなかった。

うーん、どうしようか。さつき出入りした感覚的に旧校舎の玄関はドアが歪んでいるのか立て付けが悪いのか、ちよつと不安定だったから多分勢いよく開けて出て行こうとしても、下手したらドアが開かないとかありそうだし。

「ところで渋谷さん」

ここは自分の勘に賭けてみようかな。

「もしかして、業者の方か何かですか？」

——あなたが『危険ではない』という第六感に。

■

「何故？」

間髪入れずに返ってきた問い。ええ、質問を質問で返すのか。食いつきいいなあ。思わず吹き出しそうになったのを、何とか苦笑い程度にとどめる。

「何故だと思えます？」

「質問したのは僕だが」

そもそも先に質問したのは私なんだけど。とりあえず今の会話的に…結構自己中というか、女王様気質というか。割と自分優先主義、といったところだろうか。

「君は昨日、僕に『来客カードを付けておけ』と言った。その時点で、

僕が転校生ではないと思っただろう」

「うーん、確証はないんですけど。『転校生か』と聞かれて『そんなもの』だと答えたり、学年じゃなくて歳を答えたり、はつきりした物言いを避けていたように感じたので、まあ、少なくとも訳ありだろうなって」

「他には？」

「欲しがりますね……そうだな、まず、制服を着ていないから生徒ではない。じゃあ時期のずれた転校生、もしくは転校予定か？ 微妙ですね。制服も届いていない転校生がひとりで校舎内を見回るでしょう。基本は教師が案内するものでしょう。引率が必要ないのなら、制服が手違いで届いていないだけでとつくにこの学校の生徒かもしれない？ ……失礼ですが、そのお顔で今日まで噂にもならず騒ぎ立てられもしていなかったのは不自然すぎますよね」

——まあ、ここでお会いしたってことは本当に転校生じゃないんでしょ？

一応、考えすぎかなとも思っていたんですけど。と締めくくれば、渋谷さんは……うーん、なんとなく満足そうな顔をしている……かな？ 表情変わらないなあ、この人。手塚みたいだ。

「では業者と思ったのは？」

「あなたが転校生じゃないとして、じゃあなぜ昨日、私たちの怪談に混ぜられたのかなって話になりますよね。少なくとも、怖い話が好きだから混ぜてほしかった、なんてお人柄には見えなかったのだから」
「そうかな。昨日、君たちとはそれなりに友好的に会話ができただと思っただけ」

にこり、と昨日と同じ顔で渋谷さんが笑う。——うん、この人理系っぽい。仮定から実験、証明を経て結果を出すのが好きなタイプっぽい。

同じようににこり、と笑いながら—— ゆっくり、気づかれな
いように重心を移動させる。

それは、いつでも走り出せるように。

「ええ、見惚れるような笑顔でした。残念だったのは、目の奥まで笑っ
ていなかったことですかね。元気な女子高生の相手はめんどくさ
かったですか？」

—— 立ち位置、会話からして渋谷さんとリンさんが顔見知り
以上なのは見てとれる。2対1は分が悪い。

本心に、勘と言うか、なんとなく受け取るイメージとしてはやっぱ
り『悪い人』ではない、と言うのは一貫しているけど…それが『不審
者』ではないってことではないわけで。

「カメラ、ドイツ製ですよね。こんな本格的なの生では初めて見まし
た。レンズはスイス製で…あんまりそっちには明るくないんですけ
ど、お高そうですね。よっぽどのお金持ちじゃない限り、個人の趣
味では到底手が出そうにない」

—— 例えばおふたりが趣味でこのカメラを持てる財力が
あったとして、じゃあ何故旧校舎に？ 可能性としては廃墟マニア
か、心霊マニアか。

ゆっくりと、渋谷さんが腕を組む。片足に重心を寄せ、聞く体勢へ。

—— あのポーシングからでは瞬時に動くことは不可能、かな。

対して、リンさんはあまり体勢を変えていない。うーん、こつちの
方が難敵か。

「逆に趣味ではないのなら、渋谷さんは心霊番組のディレクターとか
ですかね。まったくそうは見えないですけど」

危険ではないと思う。不審者かといわれればあまりそんな気もしない。けれどやっぱり身元不明の男性ふたり相手に女子高生ひとりというのとは心もとないし——なんというか。話しているうちに渋谷さんの雰囲気は怖くなってきたというか。目元に愉悦を感じ始めたというか。厄介なものに見つかったような感覚。身の危険を感じる。しかも貞操の危機というより生命の危機的な……。手塚とかじゃない。多分、柳とか不二あたりを混ぜた感じだこの人。

さつきまで『悪い人じゃないと思うよ』と訴えていた第六感が『でもあんまり関わらない方がいいと思うよ』と言い始めた。…三十六計逃げるに如かず、かな。立て付けの悪いドアは、それでも蹴破るくらいすれば脱出可能だ。

さつきからわざわざ求められるままにペラペラ喋っているたのいいカムフラージュになった。渋谷さんは私の体重移動に気づいてないようだ。

(よし——イケる)

渋谷さんがくちを開く。彼が話し始めた瞬間に、走り出す。校舎まで一直線に全力疾走すれば、おそらく逃げ切れるだろう。

グ、と足にちからを入れたところ——しかし、渋谷さんを遮るようにリンさんが割り入ってきた。



「我々はこの旧校舎の調査を校長から直々に依頼された業者です。信じられなければ、どうぞご確認ください」

「……へえ、そうでしたか。疑り深くすみません」

「ご理解いただけただけでしたら、そう構えずにいただきたいのですが」

「構える？ 何のことでしょうか」
（ やっぱリンさんの方が厄介だったか。失敗…これじゃ逃げられない ）

少しわざとらしくかったかもしれないけれど、わざわざ警戒していたことを言う必要はない。リンさんは追及せず目を細めた。うーん、なんかリンさんに嫌われてるような気がするんだけど、何かしたかな。リンさんの話が本当なら、ちゃんとした仕事に茶々入れられた気分になって、とか？

「……………旧校舎には近づかないように、と生徒に通告されていたと聞きました」

「え、そうなんですか？ すみません、この春から転校してきたので知りませんでした」

——『白々しい』…そう言いたそうな顔で睨まれてしまった。けど、すぐにリンさんは小さくため息を吐いて視線を逸らす。

「……………ところで、お時間は大丈夫ですか」

「え？ ああ、ちよつとマズいですね。失礼させていただきます。お仕事のお邪魔をすすみませんでした」

あまりにあからさまな誘導。それでも、『こちらはもう関わりたくない』というリンさんからのアピールに乗ることにした。まあこつちも関わりたいというわけじゃないからね。

一礼して、少し速足で旧校舎を後にする。

——実を言うで一瞬、『全然大丈夫です』とか言って困らせてみようかな、なんて思いもしたが、さすがにそこは自重した。せつかく向こうから逃がしてくれるというのならわざわざ歯向かう理由もない。

というか渋谷さん最後はひと言も喋らなくなっていたけれど、あれ大丈夫のかな。感じ的には渋谷さんの方が立場は上つぽかったのに、リンさん遮っちゃってたけど。



頭に降りかかった埃を払いつつ校舎までの道すがら携帯を確認すると、L I N Kむりよう っうしん アプリに通知があった。母と、妹と、柳。

一瞬思案してから、柳の画面を開いて通話をつなげる。この時間ならもう教室に入っているだろう彼は、その通りだったのかすぐに応じてくれた。

「おはよう、柳。ちよつと確認したいんだけどさ……ああ、やっぱり分かった？ そう、旧校舎の話。一応さ？ お前が何も言わなかったってことは、危険はないだろうと思っただけだね」

旧校舎の噂に対していくつかの確認をして（やっぱりタネも仕掛けもあるみたいだ）、そのあとにふと、あのふたり組を思い返した。

そういえば、真つ黒で到底一般人とは思えなかった彼らは、一体旧校舎の「何の」調査をしに来たのだろうか。

「そうそう、不思議な人たちに会ったよ。……さあ？ 誰だろうね。ああいや、大丈夫。危ない人ではないさ、多分ね。え？ 私の言葉は信じられないかな。……いや、違うなら良いさ」

別に深い意味があったわけじゃない。けれど、あのふたり組のことを思い返すと、なんとなくまた会いそうな気がした。

これは、最後の年を共に戦った彼らと、初めて新生レギュラーとして対面した時のような。もしくは、あの生意気なボウヤの目が、あの試合中に再び炎を灯した時のような。

そしてほんの少しだけ、あの日初めてテニスラケットを握った時の

ような。

「ちよつと、楽しみだな」

そんな、確信と呼ぶには弱く、気のせいにするには心惹かれる何かがあった。

——そこまで話して、校舎にたどり着いたから通話を切る。これ以上は柳に質問攻めされそうだったからだ。

「——そういえば、渋谷さんは今日の怪談にも来るんだっけ？」

旧校舎で対面している間は『どう逃げるか』と考えていたけど、こうやって安全圏に出るともう少し話をしてよかったかもしれないと思えてくる。だって『危なくなさそう』と思つたのも『楽しそう』と思つたのも本当だから。

あの面白いものを見つけたみたいなお顔を向けられるのは少し嫌だけど、放課後に会つた時は、もうちよつと会話に興じてもいいかもしれない。そんな風に思いながら、クラスメイトに挨拶をした。

余計なこと（気づいたしされるし）

「あつ、幸村さんおはよう！」

「おはよう恵子ちゃん」

「ねね、もし良かったら今日のも参加してくれないかな？」

「今日のもって、怪談？ うん、大丈夫だよ」

「やった！」

教室に入つてすぐ、ミチルちゃんや祐梨ちゃんと話をしていた恵子ちゃんが挨拶とともにうれしいお誘いをしてくれた。まさか2日連続で誘ってもらえるとは……こつちからお願いをしに行こうと思つていたけれど、これは本当に嬉しい。

連続で誘つてくれているということは、受け入れてくれているということだ。後ろのふたりも嫌がつてないように見えるし……これは順調なんじゃないだろうか。

仲良くなれたら、今度蓮二に「なんとかなったよ」って教えてやろうか。

「そういうえば、今日は渋谷さんも来るんだよね」

「え？ うん、昨日約束したから来てくれると思うけど……」

「楽しみだね」

「……ねえ、幸村さんって、渋谷さんに興味あるの？」

「うん？」

そわそわとした様子で意味の読めない質問を投げかけてくる恵子ちゃんに、思わず首をかしげる。

興味があるかと言われれば、もちろんあるとも。——いや、待てよ。

「あるよ。けど、こんな時期の転校生なんて珍しいからってだけで……」

「そっかー！ うんうんそうだよーね！」

しつかり当たり障りのない言い訳を添えようとしたけれど、大仰な態度で納得を示す恵子ちゃんに遮られてしまった。

待ってくれ。今私が『楽しみだね』と言ったのは『私が楽しみにしている』という意味ではなく、3人が渋谷さんをナンパ（仮）をしていたから『来てくれることになってよかったね』という意味で言ったのだ。だから断じて、断じて私がそういった意味で渋谷さんに興味があるというわけではない。

やばい。ここで誤解されれば、せつかくの女かのの子のうの友人のせいが潰えてしまいかもしれない。

でもこれ間違いない誤解されてるよね？ どうしよう。弁明をしようにも、チャイムが鳴ったのでそこでお開きとなってしまった。



キンコン、と軽快にチャイムが鳴って、最期の授業が終了した。結局あの後には弁明するチャンスがなくなってしまう。放課後になってしまった。このまま帰りのホームルームが済めば、私も、確か3人とも何かの当番が割り当てられていないので、渋谷さんが合流次第、第2次怪談大会の開幕となる。できればその前に誤解を解いておきたいんだけど…。

既に3人集まってなにやら相談をしている元へ向かいながら考え、ふと気づく。

——— あるいは渋谷さんが転校生でないということを、3人には伝えるべきだろうか。

3人は彼を転校生だと思っているから獲物ターゲットとしてロツクオンして

いる……はずだ。多分。

しかしそれが事実無根であり、実は既に社会人として働く存在だと知ったら。しかもあんな高そうな機械を使えて、自分より年上の部下を連れていると知ったら。

『ミステリアスでイケメンな転校生』は『遠い世界の高嶺の花』のよ
うなものになり、その淡い……淡い？ うん、淡い恋心……恋心なの
かなあれ……よくわかんないけれど、その淡い恋心は薄いガラスのよ
うに砕け散ってしまい、ひどく落胆することだろう。

いや、玉の輿だとはしゃぐだろうか。でも、さすがに女子高生の自
分たちが見初められるとは、本気で信じちゃいないだろう。

付き合いが浅いといえども彼女たちはいいい子で優しい子だとい
うことはよく分かる。そんな貴重な友人候補をわざわざ悲しませるの
は気が進まない。けど、このまま誤解させたままでは真実を知った時
余計にショックを受けるのではないだろうか。

しかし、渋谷さんが昨日の時点で自分の立場を明言しなかったとい
うことはあまりホイホイとくちにしていいものではないのかもしれない。
だって学校から依頼された業者だと言えば大抵の生徒は快く
調査に協力してくれるだろうに。特に彼はあの容姿なら、下手に転校
生とはぐらかすよりやり易かろう。それでも彼はくちを嚙んだのだ。

——いや、内部生なら誰もが知っているらしい不気味な旧校
舎の『何か』を調査しに来ている業者、だなんて十分すぎるほどに注
目を浴びてしまつて動きにくいから、ということだろうか。

……うん？ いや、……待てよ。そうなるよ、そう、でも、

でも、それなら、彼らは旧校舎が『いわくつき』なことを知ってい
ることになる。

——きゅ、と自分の喉が鳴つたのが聞こえた。

本来こういう怪談話は生徒と教師、身内が知っている程度の知名度
のはず。そしてこの旧校舎があまり有名でないのは、外部進学の私が

内部生の子に聞くまで知らないかったことで明白な事実だろう。

柳に確認した時も、「一部で語り継がれた、いわゆる七不思議のようなものだ」と言っていた。つまり、信ぴょう性は限りなく低い。

まあ信ぴょう性については置いておくとしても、外部の業者がそんな噂を知るなんてことがあるか？

いや、校^{クライアント}長や案内係（いたかもしれない）の先生とかが話のネタにした可能性はある。知り合いから噂を聞いたというパターンだつて不自然じゃない。近隣住民に聞き込み…は、旧校舎の何をわざわざ聞きまわるのかつて話だし、それこそあの顔が各ご家庭に訪問してきたら噂くらいにはなるだろう。

……しつくりこないな。誰かとの世間話や何かのついでで知ったとして……怪談話に参加したがるほどに興味を持つか？

ホラーマニアと言われればそれまでかもしれないが、今朝の様子からすると、渋谷さんもリンさんもわざわざ校舎に乗り込んでまで聞き出すほど興味を持っているようには見えなかった。と言っても相手の底が見えるほど会話をしたわけではないし、下駄箱騒動でそれどころじゃなかった可能性もあるけど。

今朝の会話の中で渋谷さんが興味を示していたのは私の考察だ。…あのまま会話を続けていたら話題に上がった可能性も高いけれども……それでも優先順位は低い、か？

ならなぜ昨日渋谷さんは怪談に混ざろうとした？ 次の日の予定までしつかり了承するほどに興味を示した？

そうだ、あのカメラ。あれもおかしかった。

例えば彼らが旧校舎を解体するための調査をしているとしたら、何で玄関なんかカメラを置いた？ リンさんも言っていた通り旧校舎は『立ち入り禁止』だとお触れが出てる。最早誰も通らないはずの旧校舎の玄関に、何を確認するためにあんなものを置いたのか。

イメージとしては、ああいった手合いのカメラが置いてあったということは長時間あの風景を撮る必要があった、と受け取れる。経過を

知りたい？ 一体何の？ 旧校舎の様子？

——それとも、いつ起こるか分からない『何か』を撮れるように？

求めているのは——『何か』。

『何か』を調べに来た業者で、旧校舎の『いわく』に興味があつて、『何か』を映そうとしている。

最も高い可能性が、

「——オカルト関係者、か？」

しかも装備からしてなかなか大手の業者だろうか。ペロリ、と乾いた唇を無意識に舐めた。



あくまで推察。『例えば』で『もしも』の話——そう切り捨てるには、つじつまが合いすぎる気がする。そして、もうとつくに彼らが心霊番組のスタッフとは思えない。

……さて、どうしようか。

確かに可能性として心霊マニアを候補に出したけど、それは撮り鉄系いっぽんじんタイプの話であつて……まさか学校が本職オカルト業者を招くとは思わないじゃないか。

学校という環境は、あまり突飛な存在を好まない。だいたいの教育機関は、極端にいうのなら量産ロボットのような統一された従順さを求めるし、生徒を『管理』したがる傾向があると思つている。

現代は人権だのなんだの少しずつ寛容的になってきたけれど、もとも多数決国家の日本だし。

そして、大抵の人間は『オカルト』とくれば『詐欺』と思うくらい民度が低いというイメージを持っているだろう。良くて『エンター

テイナー』かな。進路調査表にオカルト系の名前を出せば生徒指導室に呼び出されて「ふざけるのはやめなさい」「現実を見なさい」と言われるイメージ。

教育者がそんな非科学的でイカサマや紛い物の百戸する業種の間を学校に招き入れただなんて、世間に知られたらバッシングは免れないだろう。神社の神主さんとかなら文化的に話が別だっただろうけど……サブカルチャーの発展した現代。『そういうもの』に興味を持つような年頃の子たちの巣窟に、学校として正式にオカルト関係者を入れるって……そんなに切羽詰まっているのか。

——それにしても、困ったな。オカルト関連のことを一方的に否定するつもりはないけれど、そういった人たちのことを『あんまり信用ならない』『胡散臭い』と思っちゃうのは仕方ないだろう。それに変人奇人の巣窟のような業種というイメージが強い。……テニス関係も相当だったけど。

確かに面白そうとは思ったし、それは今でも変わらない。オカルトなんて未知だ。興味を持たないわけがない。

けど、——ああ、本当、余計なことに気が付いた。まさか『渋谷さんが転校生でないことを伝えるか否か』と考えただけで、こんなことに気付くなんて思うわけがない。

何がめんどくさいって……いや、めんどくさいと言うより、ヘタしたら立海テニス部や家族や越前家の皆様に余計な心配と面倒をかけたねないってことが問題なんだ。旧校舎の噂と学校に依頼された美麗で年若いオカルト業者？ 退屈な日常に飛び込んだ最高にセンサーシヨナルなニュースだ。どこからか話が漏れれば、一気に学校中を駆け巡って注目の的になるだろう。そうして、欠片でも関わったことが知られればどうなるか。……御免被る。

ああ、そう考えると、気づけたのは余計ではなかったのかな。悩みが増えたけど。

どうせ旧校舎の噂はガセだ。柳が言うには、「調べた限り問題はな

い」……つまり、噂話は害のあるものじゃない。なら何もなかったと彼らはすぐに帰っていくだろう。それか「悪霊がいる」と言つて適当なお祓いしたりするとか。どっちにしろ、わざわざ関わるべきではない。

客観的に見て、私の顔の知名度はそこそこある。そして私と立海テニス部をイコールで結ぶ人間は多い。そんな中で後先考えない無茶ができるわけがない。

好奇心で首を突っ込める範疇を超えている。この身ひとつでとれる責任の範囲じゃない。

やっぱり、今日の怪談は遠慮させてもらおう。これ以上接点を作りにたくないし。3人には……とりあえず転校生ではないことと、旧校舎に入ってる業者だつてことを伝えておいて、あまり関わらないように警告しておいた方がいいかもしれない。

「恵子ちゃん」

「あつ幸村さん。丁度よかった、今日の怪談なんだけど、どこでやるっか?」

「そのことなんだけど……」

「——ちよつと」



可愛く笑いかけてくれる恵子ちゃんには申し訳ないけど、予定のキャンセルを伝えようとした。わざわざ誘ってもらいながらドタキャンつてすごい嫌な奴じゃないか。好感度下がりそうだなあ、せつかく少し上手くいったのに。そんなことを考えながら口を開けば、——唐突に、鋭く、強い口調で横槍が入った。

あまりにとげとげしい声に振り返れば、そこにいたのは眼鏡に三つ編み、いかにも優等生です、といった委員長タイプの女の子。クラス

メイトの、黒田さん。

その目はグツと細められ、眉間にしわも寄っている。腕組をして仁王立つ様子は見るからに『嫌悪感を持っています』『面倒ごと』に迷惑してます』といった感じだ。

直接的に向けられる負の感情に、思わず大きく瞬きをしてしまう。

——— 彼女は、随分と鋭く私を睨んでいた。

「あ、黒田さん。さようなら」

「あなたたち、今何の話をしていたの？」

——— 思わずムツとした感情が顔を出そうとしたのを、とりあえず押しとどめる。

ミチルちゃんからの声かけに視線を彼女たち3人に移した黒田さんは、噛みつくように高圧的な声で問いただしてきた。

少なくとも向こうから話しかけてきた時点では全然友好的じゃなかったのに対して、比較的穏やかにあいさつしたミチルちゃんは悪くないはずだ。端から見ても、十分黒田さんが常識知らずな反応だと言える。

『ちよつと』と話しかけてきた黒田さんに『さようなら』と返した彼女もだいぶ天然というか：見方によつてはかなりの皮肉に聞こえるかもしれないが、先に友好的とは言えない態度でマウンツをとるように話しかけてきたのは向こうなのだから50ファイファイ／50ファイファイだろう。

睨みつける黒田さんに、3人はグツと押し黙ってしまった。

私は黒田さんのことをよく知らないけど、この様子からして内部進学組には揮える権力があるのだろうか。彼女たちにも彼女たち人間関係があるから不用意に首を突っ込む気はないけれど……だとしても、巻き込まれたひとりとしてこの重苦しい空気は好ましくない。自然とクラス内の視線も集まってきている。

（ 仕方がないな ）

一步、黒田さんに近づく。そうすればまた意識は私に向くから、少なくとも彼女たちは解放されるだろう。

ギロリ、また睨みつけられる。心なしか3人相手の時より目つきが鋭い気がする。私は彼女の親の仇か？

「大したことじゃないんだ。ただ、私がまだクラスに馴染めていないのを気にして怪談話に誘ってくれただけだよ。そういう遊びの方が、ぎこちなく会話するより打ち解けられるから……ああ、怪談話を選んだのは私だよ。前の学校で友人とよくやっていたからさ。馴染みあるものの方が、気安いだろう？」

一応、何かしらの誤解を受けているのなら丁寧に説明すれば退いてくれるだろうかと試みてみたけれど、———どうやら凶手だったらしい。

『クラスに馴染めていない』と言えば憎々し気に顔を歪められ、あまつさえ『怪談話』……その単語を聞いた黒田さんは、とうとう他の何も目に入らないとばかりに眉間にしわを寄せて前のめりに私を睨みつけくち元を震わせた。

大失敗だったわけだ。咄嗟に言い訳じみたことを言って取り繕ったけれど、聞こえているかも分からない。

「そうやって……!!」

———本当に、地雷を踏んだようだ。

声はゾツとするほど低い。後ろの3人が震えたのが分かる。

きっと何かが許せなかったんだろう。何かが彼女の逆鱗に触れ、不愉快にさせてしまったんだろう。

ああ、けど。

不愉快なのは、君だけじゃない。

「——何か、気に障ってしまったかな」

規律について？　けど、放課後に残って、視聴覚室を使用したのが悪いと言われるならまだしも、彼女は私たちが『怪談話をした』ということしか知らない。

「君に、迷惑をかけたつもりはなかったんだけど」

つまり——黒田さんに咎められる謂れはない。

「私、黒田さんに何かしたっけ？」

あくまで微笑んで問えば、ぐう、と唸るように黙られた。言う理由がない？　ただ気に障った？　そんなワケないだろう、そんなに熱い視線を送っておいて。なら、この場で言えないことだった？　それとも、くちに出して認めたくないこと？

「心当たりはないんだけどな…初めて喋ったよね？」

敵意を向けられて悲しむほど繊細じゃないけれど、はいそうですかと受け流してあげるほど寛容でもない。だから、今更後退っても憐れまない。だって君もまだ私を睨みつけているし。

黒田さんはすっかり黙ってしまったけれど、教室の空気は毒々しいままだ。まあ私も思い切り喧嘩を買ってしまったからなあ。

緊迫した現状。苛立ちは晴れなくとも押し黙って後退りされた時点で多少溜飲が下がったからこれ以上突つつくつもりはないけど…さて、どうすべきかな。変な緊張感が教室内に残っていて、居心地は悪い。

あ、改善策とはいかなくても、打開策としてこのまま押し切って今

日は解散しちやうのはどうだろうか。一石二鳥かもしれない。

「ねえ、今日は、」

「幸村さん、いるかな」

何で来た。



ノック音2回とともに扉を開けて教室に入ってきたのは――
――渋谷さん。なんてタイミングなんだ。もしかして、今日って厄日
だったのかな。

いや、来るって話だったけど。でもよりにもよって名指し。そうい
うのやめてください。

厄介だ。せっかく黙ってもらったのに、空気を読まずにペロリと怪
談話のことを話した渋谷さんに水を得たとばかりに黒田さんが食っ
て掛かってしまった。

まあそれでも、いきなり現れた華やかな面おもてに教室の雰囲気が変わっ
たのは喜ばしい。だがそれだけだ。

ギャンギャンと噛みつく黒田さん。『部外者』が何の用かとけたた
ましいが、私の忠告を受けてか渋谷さんは来客カードを付けている。
…ということは一応その人、学校の正式なお客さんになるんだけど
な。まあ、あの様子だとどっちも気にしてないようだけど。

名指しで呼んできた、オカルト関係者の可能性が高い渋谷さん。

怪談話の関係者だと聞いて、食って掛かる黒田さん。

遠巻きに見てくるクラスメイト。

混乱のままに、こっちを伺い見てくる恵子ちゃん、ミチルちゃん、祐
梨ちゃん。

恵子ちゃんは渋谷さんにがなりたてる黒田さんに、恋する乙女のパ

ワー？ 言い返そうとしていたが、旧校舎の幽霊について語りだした黒田さんにとうとうくちを閉ざしてしまった。

なるほどこれが混沌^{カオス}。まさかと思うけど、この騒動の收拾って私の仕事とか言わないよね。

——しかし、聞いていて思うのは黒田さんの主張は随分と流暢だということ。どもることも悩むこともなくベラベラとしゃべる。

どこことなく演技じみて感じるのは私がひねくれているからだろうか。慣れたようにベラベラと話しているが、言葉を選んでいると感じる。それが、相手を不快にさせないためだという訳ではない、というのは明白だけど、では何故か？ ……そんなの、愚問かな。

どうしてあそこまで冷たい言い方をするのか。本人の言っている通り、『見える』故の孤独から？

特殊は孤立する——そんなもの、古今東西とつくに分かりきったことだろう。

黒田さんはどうだろうか。普通なら、『自分が見ているものは普通ではない』と認識すれば、周囲の目を恐れてくちを噤^{つぶ}むと思っただけ。でも彼女はベラベラとしゃべる。まともじゃない人間を見るような視線の中で、当然のように喋り続ける。何かに憑りつかれたように。正直言って、否定されてもなお自身の主張は揺るがせない、なんて精神力の高さは感じられない。

——渋谷さんは冷静だ。冷静で、残酷だ。

あまりに冷静に、いつそ冷酷に、黒田さんの主張を正論で叩き潰す。必死に主張し続ける黒田さん。彼女が言葉を紡ぐたび、まるで彼女が自分から暗い所に入っているように見えてくる。

思わず大きなため息が出た。

まあ正直、冷たいことを言うのなら彼女が結果破滅しようとも関係ない話だ。しかし、

「黒田さん、今日用事があるって言っていなかったっけ。もう随分と時間が経ってしまっているけど、大丈夫？」
「は、」

——これ以上自分を名指しして呼んできた相手と一緒に目立たれるのは困る。



唐突。その一言に尽きるセリフとタイミングだった。自覚は十分にある。けれどこの時点で自分の中に『自重』の2文字は間違いなくなかった。何故か。だって機嫌が悪いのだ。

理由が思い当たらないのに噛みついて敵視してくる黒田さん。周りからの視線。予定をぶち壊した渋谷さん。なにより、元は私を含んだ4人が発端だったくせにすっかり私を蚊帳の外にしている現状。これだけ巻き込んでおいて放置？ まったくもって、そう——
不愉快。

「幽霊云々については見たこともないからよく分からないけど、それだけ君が言うのなら今日も、これからももう軽率に怖い話なんてしないよ。これでいいだろう？」 話はこれで終わり。黒田さんはどうぞ、自分の用を済ませに行っていいよ」

口調は穏やかに、それでも多分、向けられた黒田さんは友好的には感じないだろう。

少し煽るような言葉選びになってしまったのはそれだけ気分が悪
いから。大目に見てほしいね。

とってつけたような「君が言うのなら」という尊重の言葉に反した、遠回しな「早くどっかに行け」というメッセージはどうやら無事に伝わったらしい。

「え、ええ、そうね。そう…わかつてくれたならいいの。それじゃあ、私、用事があるから失礼するわ。さようなら」

目を彷徨わせて、さつきまでよりちよつと小さな声でそう言った黒田さんは足早に教室を去っていった。その姿にさすがに言い過ぎたかな、と思ったのも一瞬。そもそも敵意を向けられなければこつちだってこんな対応を取らない。しかもこんなに話をめんどくさくして…誰が収集を付けると思ってるんだ。

「渋谷さん。そういう訳で、今日も、これからも、怪談話は中止になってしまいました。3人ともごめんね、勝手に話を進めて。今度は別の遊びに誘ってくれると嬉しいな」

「え、う、うん！」

「大丈夫だよ、全然!!」

「う、うん、今度、また誘うね！」

「……そう、なら仕方ないね。じゃあそれとは別に、幸村さん、君に話があるから少し一緒に来てもらいたいんだが」

（ いい加減にしろ ）

少し無理矢理になってしまったが、一応3人からはOKを貰えた。さりげなく約束を取り付けてみたが、どうだろう。社交辞令と思われたかな。返答も引きつけていたし、さつきのでドン引かれちゃったかもしれない。恨むよかみさま。

しかも追い打ちのような渋谷さんのセリフ。思わず心の中で罵倒が出てしまう。この男、余計なことをしてくれた。天を仰がなかったのは最後の理性でありプライドだった。

ザワ、と人の残った教室内に動揺が広がる。微かに聞こえるのは、年頃ならではの『邪推』。……多分、いや間違いなく渋谷さんにその気

はないだろうし、私にだってない。けれどそんなことは彼らには何一つ関係ないのだ。

ああ、これだから勘弁してほしかったのに。

後ろを振り向く元気はない。ここには渋谷さんに『ロックオン』した3人がいるのに、よくもまあ誤解されるようなことを言ってくれたな。女の子はこういう、恋敵云々に対しては酷く陰湿で凄惨なところがある。そんなもの何度も見てきた。

せっかく仲良くしてくれていた女の子を……。

「ああ、今朝の件ですか。ご迷惑をおかけして申し訳ありません。では場所を移動しましょう。3人とも、また明日」

———これで私の新生活の目標である『女の子の友達を作る』が失敗したらどうしてくれるんだ。

表面はポーカーフエイスを保ちつつも、なんとか『そういうアレソレではない』っぽいことを言ってみたが、果たして彼女たちは納得してくれるだろうか。

わずかな不安を持って3人に振り返れば、

「う、うん！ いつてらっしやい!!」

「頑張ってるね!!」

「応援してるね!!」

———どういうことだろうか。

何か、何か朝の時とは比べものにならない覆せないような誤解を受けている気がする。

しかし渋谷さんを待たせている現状で問い詰める余裕はなく、これではまた弁明の機会を得られないままだ。

教室中から向けられる視線にうんざりしながら、黒田さんのように足早に荷物を持って教室から出ることにした。今ちよつとだけ彼女に同情できたよ。

明日：明日こそは、誤解を解きたい。

「着いてきてください」

目指すは一階の、特別教室前の廊下。人通りがほぼなく、玄関の近くだから外に出ることもできるお忍びスポットだ。
なにより、職員室に直通である。

本当に、今日は厄日だ。

彼女の視界（異世界かそれとも）

教室を出てすぐ階段を駆け下りた。渋谷さんは案外文句を言わず着いてくる。まあもし何か言われても聞く気はなかったけど。

幸い目的地までの道のりは人が少なく、大して騒がれることなく移動することができた。

歩きながら考える。多分渋谷さんはもやしっ子ではない。インドアに見えるけどある程度動けるタイプ。服の上からだあまり分らないが、細いが薄くない体からは筋肉かっていることがうかがえる。

まあつまり、渋谷さんがヤバい人だった時彼に対抗できるかどうかという話なんだけど。

本当は信用していない相手にふたりきりでこうして背中を見せて歩くのもあまりよろしくない。けど、今回ばかりは移動速度優先だ。

一応間合いはとっているけど、さて。なにせ向かう先は人気のない場所。自分から危険なところに向かうようなもの。でも、だって人の目のあるところで渋谷さんと話すとか目立つから仕方ない。

渋谷さんがヤバい人か大丈夫な人か…まるで運試しだ。大丈夫だとは思うけど。

目的の廊下に辿り着き、体を反転して向かい合う。渋谷さんはすぐにくちを開いた。

「彼女はいつもああやって騒いでいるのか?」

わあ。せつかちだな。いや、時間を無駄にするのが好きではないタイプか。移動を受け入れたのは自分にもメリットがあるから? と

もかく、彼はさっさと話しを進めたいらしい。

さて——彼女。彼女とは…考えるまでもなく黒田さんのことだろうけど、もう少し分かりやすく言っただらいいな。いいけど。しかし何故彼女を気にするのだろうか。

絡まれたから？ 不気味に思ったから？ ならこんな淡々とした言い方をするものか。それに、少なくとも教室を出るときに、渋谷さんは黒田さんを最後に一瞥し興味を失ったように見えた。というかあれだけ言葉で潰しておいて不気味も何もないだろう。

じゃあ一目惚れ？ それこそ笑い話にもならない。なら何故か。

——オカルト関係者だから？

「さあ、今日初めて話したので。何故？」

「…ずいぶんと、自分の靈感に自信があるようだったから。本当に靈能者かな」

その問いは、どこか楽しげだった。しかしきつと、彼女のことを嘲笑っているわけではないのだろう。

彼の笑顔の理由はおそらく——私だ。

試している。私という人間を、見極めようとしている。

渋谷さんの目がすう、と細まる。笑顔ではない。鋭い視線に、こちららは半目になってしまった。無意識かわざとかは知らないけど、その顔でその表情は脅しに等しい。…わざとだったら渋谷さんの自己認識の高さは素晴らしいな。自分の武器の使い方をよくよく理解している。

(……それにしても、やっぱり)

渋谷さんがオカルト業者という推察が現実味を帯びてきた。というか、もう脳が全てそっちに繋げようとしてくる。彼は今、『自分の靈

感に自信があるようだったから』と言った。それは間違っても『靈的なもの』を否定する言葉ではない。

そういったものがあると認識して受け入れている、と受け取れる言葉選び。

それに、教室で黒田さんへ切り替えした言葉の数々はあまりにも旧校舎について入念な下調べがされていたように感じられた。ちなみに旧校舎解体のための地質調査とかの業者という線も考えていたけど、地質調査に旧校舎の歴史が関係あるとは思えないし。困った。一般的な職業の可能性がごとごとく潰れてしまった。

……現実を見ようか。

彼は今、私を見極めて、見透かそうとしている。——それが意味するのは。恐らく、多分、いや、おおよそ間違いなく、私を引きずり込もうとしているということなのではないだろうか。

避けようと思っていた厄介ごとが向こうからやってきた。溜め息を飲み込んだだけ頑張った方だろう。

渋谷さんはじつと私を見る。彼の目は案外お喋りだ。少なくとも、彼は誰も貶めるつもりでないことはありありと伝わってきた。おそらく私に興味があるのか、知りたいことを知るために黒田さんの話題を利用した、といったところだろうか。

短い経験則、あまり性格がよろしくないだろうこの人は——いや、こういったタイプの性格は、ナマイキで傲慢で尊大な態度をとっても、真に相手を蔑むことはない。

誰に似てるかな。ボウヤ？ 確かにナマイキだ。あ、跡部？ 尊大尊大。傲慢については案外ふたりともに当てはまるかな。そしてどちらも、間違うことはあっても人間性は悪くない。誰かを悪意で貶めるようなことはしない。……ああ、いや、今は——飛び始めた思考を、間一髪引き留める。

今はまず、渋谷さんの質問に答えるべきだろう。

「——それこそ、私には分からないですね。そつち方面は素人なので。本人がそう言っているのならそうなんじゃないですか？」

「淡泊だな。君は靈能力の類に対して否定派か？」

「肯定も否定も、私は見えないし感じませんから。じゃあ『見える』と言っている人がそう言っているならそうなんじゃないか、つてことですよ。黒田さんについては：彼女の視界が他人とどう違っているかなんて、他人わたしに分かるものじゃないでしょう」

——かつて、私が誰にも理解されなかったように。

他人ひとは案外、すぐに理解を放棄するものだ。

いつそ残酷なまでの自己保身によつて切り捨てられた『特別』は、誰からも切り取られた世界でようやく『特別』を知る。

私がそう考えるのは、当人がどれだけ訴えたところで他人がそれを理解できるとは限らないということを知っているし、私の見えるもの、感じるものを他人と完全に共有できることなんてできないと分かっているから。

すり減っていたかつての私は、そうして『他人』という生き物を知つたのだ。

自分の考えを割り増しきようみをもちたれないようで淡泊にそつけなく伝えながら、逃げようか、と一瞬考えた。

しかし、逃げ切れるだろうか。『ならいい』と引いてくれる確率は：それこそ一か八かか。依頼人は校長らしいし、本当に私を巻き込むつもりならここで断つても校長を通して話を持って来る可能性もある。下手すればまた教室に乗り込まれるかもしれない。今日みたいに、何に憚ることはない、名指しで。

簡単に逃がしてくれられるような雰囲気ではないし、私は彼の行動を抑制できるだけの切り札カードがまだない。拒否権はある。というかきつと私わたしが本気で嫌がりでもすれば、強制できる話ではないだろう。渋谷さ

んは気にしなさそうだけど、ただでさえ胡散臭い『オカルト』タイプの勧誘なんだから先生方くらいは守ってくれるはずだ。

けど、転入早々部外者とトラブルを起こして目立つのは望ましくないわけ。

なにより、別に渋谷さん自体に嫌悪感を持っているわけではないというのが大きい。

「僕らは旧校舎の調査に来ている」

「今朝聞きましたね」

「それを聞いて、幸村さん。あなたは、僕らがどういう人間だと思ったか。聞いても？」

言葉尻を上げてクエスチョンマークを付けるくせに、当然言うよね？　と言わんばかりの態度。とんだ傲慢。ここまできたら扱いやすい分ボウヤのナマイキくんがかわいく見える。

瞳は凧いでいた。けどわずかに、楽しむような色を見つけた気がしたら駄目だった。

「まあ、オカルト関係者かなって思いますよね」

——まあ、面倒ごとって巻き込まれるより突っ込んでくほうが被害が少ないっていうし。どうせ不可避なら、まあ、仕方ないか。そう、これは妥協であって断じて好奇心に屈したわけでも絆されたわけでもない。断じて。断じてない。……断じて。……いやまあ、多少はあるけれど。

私の返答に渋谷さんの顔が緩んだ。ほんの一瞬、挑戦的で満足げな笑みはその端麗な顔かんばせを彩るものだから、思わずこっちの顔には苦笑いが浮かんでしまう。

理由は求められなかった。ということは、何かは分からないがいつ

の間にかこの人を納得させる何かを私は与えてしまったらしい。やっぱりこれ、逃げてたら追いかけてた可能性高かったな…。

まあ、あいつらも、家族も、たぶん越前家の人たちも、なんとかするだろう。少なくとも頭の中で説得する算段を立て始めてしまうくらいには鮮やかな色彩だった。



「単刀直入に言うと、君にアルバイトをしてほしい」「アルバイト、ですか」

言われた言葉は半分子想通りで、半分子想外。協力ではなくアルバイト、ということは給料が出ると判断していいのかな？

疑問のまま反復すれば、渋谷さんはひとつ肯首して、続きを話す。

「業務内容は旧校舎の調査に対しての協力。期限は解決するまで。勤務時間は放課後だいたい4、5時間。休日出勤についてはその時々によるが、朝から晩までになることもあるだろう。もちろん労働基準法に反しない勤務体制はとる。基本は休憩45分と7時間45分勤務。それを越えれば残業手当も入れる。主に機材の運搬やデータ収集のアシスト、基礎データ収集など素人でも問題のない雑務を任せたい。機材の運搬はあの下駄箱を支えられた程度の筋力があるならという判断だが、肉体労働に不満は？」

「体を動かすのは好きですよ」

「結構。肉体労働は現場業務に入るから危険手当が出る場合もある。だいたいのがヤランデイの目安は、」

つらつらと淀みなく並べられる内容に、やっぱりこの人最初から巻き込む気満々だったんだなと再認識した。ただ有能だからその場で説明できてるだけじゃないだろうこれ。業務内容説明する準備して

きてたなこれ。

そして提示されたのは他のアルバイトとは比べ物にならない高額報酬。

…これ高卒会社員くらいはあるんじゃないか。

顎に手をかけ、指でトントンと弾きながら、考える。

正直もう話を受ける気はある。けど、素直に頷くのは癪だし、扱いやすいと思われても困る。

手元が増えた切り札は『任意である』『向こうから求められている』というふたつだろうか。こっちからもう少しくらい条件を付けられるかもしれないが…同時に、副作用がどうなるか分からない劇薬でもある。なにせ相手はこの超短期間の接触だけで『厄介だ』と頭を悩ませてきた渋谷さんなのだから。

このおいしい話のネットワークなところは、時間が不規則、不資格などころ。そしてどんなハプニングがあるか皆目見当もつかないが、危険はあるだろうということ、かな。不規則な生活はトレーニング量が確保できないし、体調にも影響が出る。危険については言うまでもない。あとあれだ、社会の目。

…いや、高望みをしすぎているのだろう。バイトもしたいけどしっかりトレーニングもしたい、なんて。バイトということは給料が発生して、金銭を受け取るということは責任があるということだ。もちろん都合よく、というのは到底無理な話。バランスを見極めて折り合いをつけるしかない。

社会の目については…思いつくことがないわけではない。

「ああ、一番肝心な話を忘れていました。改めまして、渋谷さん。あなたがどこの、誰なのか」

「渋谷サイキック・リサーチの所長、渋谷一也。職種としてはゴーストハントだが…正確には『退治』というより『調査』が主。日本では馴染みのない職業だろう」

うわあ。思ったよりしつかりオカルト業者だった。いや、まああれだけの機材があるなら大手だろうとか思ってたし言っただけど、改めて言われると…。

しかし、ゴーストハント、ねえ。

「そうですね、聞き覚えがないですがそこは私の無知ですから。…：では、生まれてこのかた幽霊を見たことも心霊現象を体験したこともない素人ですので、十分ご指導ご鞭撻べんたついただけることが前提になりませんが」

少なくとも渋谷さんの性格は嫌いじゃなくて、仕事内容にも不満は無く、待遇もいい。周りの目については私が上手く立ち回ればいだろう。噂も好奇の目も今更だし。

まったく、関わらないと思っていたのに1時間も経たずに手の平を返すことになるとはなあ。まあそこは、渋谷さんのお人柄の賜物だと丸く収めようか。

「よろしくお願いします。」

「——ああ、こちらこそ」



さて、ではさっそく業務に取り掛かる——というわけにはいかない。

まず先ほどの騒ぎで渋谷さんという存在が目立ってしまったのがある。すごい美人が来たということくらいは話題になっているだろう。なにせこの顔。インパクトが大きすぎる。

まだ玄関には多くの生徒が残っており、そこに渋谷さんと一緒に出ていけば視線で蜂の巣になる。腹をくくったからといって好き好んで噂になりたいわけじゃない。

それにもつと根本的な問題がある。当然だが、まだバイトの許可申請をしていないことだ。

学生である私がアルバイトをするにはまず学校に許可申請をしなくてはならない。勤務場所が校内でバイト先が学校公認(?)とはいえ、バイトの許可は当然必要。

しかし職員室は窓が大きく玄関から中がよく見えてしまうので――
――校長室に駆け込むことにした。

校長室は出入口が玄関から死角になっているし、来客対応もするから中が覗かれにくい構造になっている。なにより校長は依頼人クライアントだし学校の責任者だ。校長さえ口説き落とせば、オカルト業者なんて胡散臭いアルバイトに表立って反対する先生はいないだろう。

となればの現在もつとも間近な問題は――

「渋谷さん、失礼します」

「――これは？」

「校長室はこの廊下の突き当りなので、今からここを渡るんですけど……」

私が着ていた指定のカーデイガンを脱ぎ問答無用で渋谷さんの頭に被せれば、当然のように渋谷さんから訝しげな顔をされた。まあでしようね。あれ、でも抵抗されなかつたな。はじき落される可能性も考えてたのに。

さて、目的地が廊下の突き当りということとは、この廊下を通り過ぎなくてはいけないということ。そしてここはいくら人気がなくとも、隣接する特別教室では文化部が細々と部活動をしているので無人ではない。

つまりもつとも間近な問題は、この廊下を無事に渡り切ることだ。

「渋谷さん目立つでしょう」

その目立つご尊顔を隠せば多少は対策になるはずだ。

この学校の指定カーディガンのデザインは男女共同。ぱつと見ながらカーディガンを頭からかぶった男子生徒だと勘違いさせられるだろう。

教室から見える廊下は出入口の扉の窓を介してのみだし、窓の位置的にスーツのズボンは見えない。そして渋谷さんの身長は私と同じくらい。長身だけど同じくらいの私が隣にいれば、通り過ぎるだけならそこまで目立たないはず。

「ずいぶんと目立つのを嫌うんだな。君も、——」

カーディガンの隙間から目が合ったのもうちよつと深く被せておこうとカーディガンを引っ張れば、うっかり渋谷さんのセリフを遮ってしまった。うわあ、顔が見えないのに物凄く不満そうなのが伝わってくる。無視したわけじゃないですから、すみませんって。

「なんて言いました？」

「……君も大概目立つ、と」

「なるほど。ありがとうございます」

そんなことは知ってるさ、慣れてるから。

「……まあそれは置いておいて。実は、原因は不明なんですけどどうにもクラスメイトに遠巻きにされていまして。だからあまり悪目立ちしたくないんです・今は女の子の友人を得るのを目標に努力中ですから。同性の友人が欲しいじゃないですか。ね？」

だから火種となりそうなあなたと噂を立てられたくないんです：とは言わなかった。さすがにそこまで言えば失礼だし、最終的にバイ

トを受けると言ったのは私なのだから我儘にも程があるだろう。でも『悪目立ち』と言ったのは噂されるのは本当に勘弁願いたいからだ。言わないだけで思っているなら同じかもしれないが、そこは置いておいて。親密だと誤解させられない。それにちよつとだけ協力していただきたいのだ。

嫉妬がらみの敵意は、立海で散々受けた記憶がある。

単純に彼らに恋をした子たちや、自己顕示欲の果てに彼らを求めた子たち。

——— | ——— | ——— | ——— | ——— | ——— |
好きになつてほしい。 | 彼がほしい。 | こつちを見てほしい。

どうして私を選んでくれないの。 | どうして——— |
その女ばかり優遇されるの。

特に後者がめんどくさかつたんだよなあ。彼女たちにはあいつらがブランド物のアクセサリーが何かに見えているらしい。執着がすごかつた。

別にチームメイトから恋愛的感情を向けられたことはなかつたし、私だつて向けたことはなかつた。が、そんなことは彼女たちには関係なかつたらしい。

彼女たちにとって私は好きな人の一番近くにいる羨ましい———
——— | 大っ嫌いな、目障りな子。

それに伴い嫌がらせとかもあつたわけで。まあ泣き寝入りするほどかわいい性格もしてないからやられっぱなしじゃなかつたけど。

この話はここまで
閑話休題。

つまり、友好的友人を作るには余計な火種対策が大切だということ

で。

「……君の交友関係に興味はないが、そう言うのなら雇用条件のひとつとして受け入れよう」

「ひと言多いって言われませんか？　でもありがとうございます」

どう考えても余計なひと言を含ませるセリフはともかく、思いのほか物分かり良く許可を出してくれる上司に思わずこちらもにっこりしながらその手を握る。あ、思ったより大きい。

「ご案内しますね」

「……………」

「……………渋谷さん？」

「……………これは」

「視界が悪いでしょう。これくらいはサポートしますよ」

まあこつちの都合で不便を強いているので。そう思った配慮だったのだが、渋谷さんはすっかり黙ってしまった。おや、と首をかしげる。もしかしてこういったスキンシップは嫌いなタイプだったのだろうか。

——ベタベタされるのは嫌いそうだけど、この程度なら一周回って気にしなさそう、と思っただけだ。思ったより潔癖だったかな？　うーん、でもカーディガンの被りが浅くてうっかりご開帳されたら困るし。

「不快かもしれませんがちよつと我慢してください」

「……………いや」

「校長室までですから」

手をつないでいた状態から、位置をスライドして手首を掴んだ状態に変える。こつちならまだ不快指数も低いだろう。ただこの握り方

はどうしても握ってる方が主導権を持つてるように見えるから、手と手にしたのは配慮のつもりだったんだけど。エスコートするみたいにつなげばよかったのかな。

まあ振り払われないならこれ以上気にしなくていいか、と気を取り直して校長室を目指した。

仕事開始（まずは知ってもらおうか）

所変わって、旧校舎直通裏道。

校長室でバイト許可申請が終わり、私たちは校長先生からのアドバイスでこの秘密の裏道を通ることになった。

この道は校舎の陰になっっているうえ、なかなか獣道なので内部生でも知っている子は極僅か&知っていても通らないという穴場道だ。というかそもそも旧校舎に近寄る人がいないので、つまりはほぼ誰も通らない。おかげで部活生の目がある校庭側を通らずに旧校舎へ行くことができた。

人が通らない獣道はなかなか障害物が多いが、幸いにも渋谷さんは思ったより運動神経がいいのかスルスルと進んでくれる。私？ はは、今更獣道程度で困るように見えるかな。

「とりあえず、今回の旧校舎の依頼について説明する」

「よろしくお願いします」

歩きながら説明をしてくれた渋谷さんの話を簡単にまとめれば、古い建物は危ないから旧校舎壊したい。というか不吉な噂多すぎてわが校の威信に関わる。なのにことごとく危ないことが起こるからちーつとも工事が進まない。だからなんとかどうにかしてくれ、という話らしい。

「依頼があったのが一週間前で、調査を開始したのが昨日、ですか」

「ああ、その間は事前調査を。当然だろう？」

「そうですね。それだけ慎重に事を進めてもらえるのは、いち生徒としても雇われた身としても安心します」

と、そこまで話し終わったところでお目当ての旧校舎の裏側に到着

した。人通りはないけど迂回コースだからちよつと時間かかっちゃうんだよな。

それにしても、校舎裏も雰囲気があるなあ。うーん、不気味でもあるけどこう、桜と合わさってどこか趣がある感じ……実は嫌いじゃない。

「仕事の前に、聞きたいことがある」

「？ 構いませんが」

すたすたと車（今朝見たやつだ。校舎裏に異動したのか）に近寄りドアを開け放った渋谷さんが取り出したのは小さな機械。長方形の、長さは10cm前後といったところだろうか。

「それは？」

「ボイスレコーダー。昨日の怪談で、旧校舎の噂は出たか？」

「出ましたよ」

「覚えている限りでいいから録音させてくれ」

「ええ……構いませんが……」

思わず曖昧な感じになってしまった返答に、渋谷さんの眉が動いたのが見える。

「何か」

「いえ、何も」

「……何か思ったことや気づいたことがあったら言え。たいしたことでもなくとも、『素人に知識を教える』のは契約内だ」

ふん、とため息をつくように鼻を鳴らした渋谷さんに、おや、と思う。言い方はそっけないが、これはもしかして気遣いだろうか。勘違いかもしれないが、それならお構いなくとくちを開くことにした。

「……まあ女子高生の怪談ですから、曖昧だし、拡張されたりねっ造されてたり、役に立ちそうもないよなあと思つて。昨日といい、渋谷さんがどうしてそんなに知りたがるのが疑問でした。私の友人はこの学校を調べた時、噂は全部噂で裏が撮れたものばかり、何ら不自然な点はないと言つていたので……十分下調べしているらしい渋谷さんが今更何が気になるのかな、と」

もうこの短い交流で噂話を真に受けるタイプだとはまったく、まつつつたく思つていないので余計に違和感のようなものを感じてしまった。聞くだけ無駄ではないだろうか。

割と歯に衣着せずペロリと言いつつ私に、渋谷さんはそんなことか、と鼻を鳴らした。……うそう。ついでにこの短期間で、このタイミングで鼻で笑うのが渋谷さんだなあつて思わせてくるつていう。影響力が強い人だなあ。

「もとから情報源としてはあまり期待していない。重要な情報がある場合もあるが……今回はただ、生徒たちにはどう受け止められていて、何と認識されているかがデータとして欲しいだけだ」

「ああ、納得しました。じゃあ渾身の演技力を持つて語らせていただきますね」

「いや待てどうしてそうなる」

普通でいいだろう、と少し困惑気味の渋谷さんに、サービスのつもりだったんですが、と返しながら少し笑ってしまう。この人、多分特定の物事以外に興味関心が低いだけで無感動つてわけじゃないんだろう。こういうたちよつと年相応な反応を見れるとつい、笑ってしまう。

冗談ですよ、といえは溜息を吐かれた。

「じゃあ、覚えてる限りですけど……」

「なるほど。どうやら教師側が把握している内容と大差ないようだ」

カチ、とレコーダーの録音を終了した渋谷さんは、確認するように呟いた。どうやら先生方にも聞いていたらしい。それから、こちらを見て「確認したいことがある」と言う。

「君の友人は旧校舎を調べたと言っていたな」

「ええ、私が転入するにあたってある程度調べてみてくれたみたいで」

「……その情報と、こちらが持っている情報をすり合わせたい」
「構いませんよ」

了承すれば、渋谷さんが取り出したのは手帳型の……メモ帳？ 促されてのぞき込めば、すべて英語でメモがしてあった。

……もしかして、渋谷さんは母国語が英語なのだろうか。流ちょうな筆記体で書かれたメモは、一面いっばいに情報が書き込んであった。

それを指でなぞりながら質問してきた渋谷さんに、蓮二から聞いた情報を反芻しながら答える。

「旧校舎が使用されていた間は頻繁に死人が出ていたということは？」

「聞きました。18年前までは1年にひとり、ふたりは亡くなっていたとか」

これは異常な数値だろう。話を聞いたときはびっくりした。時代があったかもしれないが、学校がある種の聖域扱いされる中で度重なる死者、というのはかなり批判を受けたのではないだろうか。死因に学校の責任がなくとも、学校に死があったことが問題視されたはず。

これだけ死者が出れば『いわく』がつくのも納得だ。……推測だが、新校舎が建てられたのは校舎の老朽化だけが原因ではないのだろう。

「旧校舎西側の取り壊し工事については」

「事故はあったが死人は無し。えーっと、原因は使用していた重機の整備不良で、そもそも工事はもともとから3分の1だけ取り壊す予定だった」

「子供の死体が発見された件」

「営利目的の誘拐。犯人は逮捕済みで、まだ生きている」

「自殺したという教師」

「遺書があり、原因はノイローゼ。そしてノイローゼの原因は、確かその先生が担当していたクラスが学級崩壊があつて……いじめられていた子が精神を病んで入院したことをPTA・学校・教育委員会に責め立てられたこととか」

——ちらり、と渋谷さんがメモから目を離して私を見た。

「トラックの暴走」

「ああ去年の……運転手が飲酒をしていたことが原因でしたっけ」

「そう。この時はさすがに工事が中止された。校内で死人が出たため学校や業者への責任追及が激しかったのと、『旧校舎の呪い』だの『旧校舎の霊のせい』だのという噂が飛び交ったからだろう」

そこまで言って、渋谷さんはメモ帳を閉じた。どうやら蓮二が持ってきた情報は渋谷さんのお気に召したらしい。

「ずいぶん情報通な友人だな」

「自慢の参謀ですから」

「君も分かっていると思うが、不吉と言うわりにどれも原因のはっきりした事件ばかりだ。統計から考えるのなら、僕はそんなに大した事件ではないとふんでいる」

「うーん、確かにタネが分かれば言うほど不吉ではないかもしれませんが、それにしても旧校舎というピンポイントな場所で良くないことが連続しますね」

「必然のような偶然はどこにでもある話だ」

だからこそ『いわく』がついたのだろう、と確信に迫ったことを言ってみたが、そんな私のセリフをばっさり切り捨てた渋谷さんは、「仕事に入る」と話を切り替えた。



「まず設置していたマイクを回収してもらおう」

「マイク…?」

唐突にマイク、と言われてすぐに出てくるものと言えば、学校の集会などで使われるものやカラオケにあるものだ。もちろんまさか旧校舎でカラオケ大会をしたとは思っていないが……

「何に使っていたんですか?」

「……マイクは普通、音を拾うために使うものだろう」

「なるほど。ふふ、スピーカーと混同して『声を大きくするための機械』としての認識の方が強かったものですから」

移動しながら指示されたことに首を傾げれば、少し呆れたような視線をいただいでしまった。そりやそうですが。いや、正確には音を電気信号に変換する機械だけでも。確かに役目は『收音』だけでも。

まあしかし、普段の使用用途が違えば認識も違ってくるものだろうからそこまで腹は立たない。

旧校舎の横には開かれた校舎の窓の前にいくつかのマイクスタンドが設置されていた。マイクも想像していたようなハンドマイクと違い、太く、大きなもの。高そうだなあ……。これだけの機材、揃える

ための資金はどこから来てるんだろう。渋谷さんに貢ぎたいパトロンとかかな。…冗談だけど。

「よく調査されていない幽霊屋敷ホーンテッド・ハウスに入るのは危険だ。だから最初は建物の外からできる限りの調査をする」

「ああ、それでカメラとマイク…あれ、でも今朝渋谷さんとリンさん？は校舎内に居ませんでした？」

思わず思い出して呟けば、じつと無言で見つめられた。

ああ、なるほど。どうやらちよつと簡単ではない話題だったみたいだ。渋谷さんの目がまた私を見極めようとしている目になった。

につこり、できるだけ無害そうに笑っておく。他意はありません。害もありません。という涙ぐましいアピールだ。

「……条件がそろっていたからな」

はぐらかすようなことを言っておくことをそらした渋谷さんに少し落胆する。どうやら詳しく話してくれるつもりは無いらしい。飲み込まれた言葉は彼にとって私が信用に足る人物だと確信されていないことの証明だ。

「ああ、大した事件じゃないかもって言ってましたもんね。じゃあ旧校舎は思ったより安全なのかな？　少し安心しました」

まあ今回は追及せずについておくことにした。まだ出会って間もないのだから向こうが手札カードを見せたがらないのはおかしい話じゃない。しかも相手は今回限りの短期バイト。必要以上の交流は必要ないと思われている可能性が高いだろう。

個人的には渋谷さんって面白いなあ、と思ってしまうので、この調査中に少しは仲良くなれば楽しいかな、と思っているのだが。

努めて明るく笑いかけると、渋谷さんはまた私に視線を向けてからくちを開いた。

「あくまで僕の所感だ。いくら念入りに調査をしたとしても、ホーネットド・ハウス幽霊屋敷ではいつ何が起こるかわからない。もちろんパターンもあるが：気は抜くな」

「それはもちろん。『用心に怪我なし』ですね。居安思危きよあんしきを心がけていきます」

納得、といった顔で頷けば、：少し変な顔をされた。というより、一瞬動きが止まった？

瞬きの間の違和感。本来なら気にも留めないようなことかもしれないが、こと渋谷さんにおいてはその反応を見てひとつ思い浮かぶことがある。

「渋谷さんは——」

——渋谷さんは、多分、あまり日本に馴染みがないのかもしれない。

さっきのメモからして、育ちは英語圏なのではないだろうか。日本語はずいぶん流暢だが、今のリアクションは多分『用心に怪我なし』か『居安思危』が彼のライブラリに引っかけからなかったということではないだろうか。

必要な範囲が広いから多くを知っているけれど、その分必要じゃないところには手を伸ばしていないタイプだろうか。だから話の流れからニュアンスを感じとれても、言葉の組み合わせや——これはまだわかんないけど、たぶん音で聞いた漢字の組み合わせという面からはニュアンスを感じ取れていない、かな？

もちろん、日本人でもこのふたつの諺ことわざや四字熟語を知らない人は多いだろう。けれど……

……正直、わざわざ諺ことわざと四字熟語を引っ張り出したのは渋谷さんの

反応を見るためでもあった。絶対言わないけど。

『渋谷さん帰国子女説』もしくは『渋谷さん来日外国人説』はかなり有力になったかな。

だとしたら、出身はどこだろう。ラテン系？　ゲルマン系？　いや、顔の系統は割とアジアに近い…というか普通に整っているから分かりにくいな。でもヨーロッパとアジアのハーフとかが一番的を得てそう。

「……………うーん、やっぱりなんでもありません」

「…なんだ。さつきも言ったが、」

「ああいえ、仕事中にする話じゃなかったの」

けれど、ひよつこり顔を出した好奇心はきつちり握りつぶす。危ない危ない、探検気分で追及するところだった。

人のプライバシーをアレコレ詮索するのは褒められたことじゃない。少なくとも彼は私に害をなそうとしないのに好奇心で探るのは許されたことじゃないことくらい分かるとも。

まあ、これから親しくなつて本人が話してくれた時に許されるだけ聞けばいい。今、それが私たちの距離感において最も正しい選択だろう。

「マイク、分担して運びますか？」

「……………ああ、君はマイクを運んでくれ。僕はスタンドを運ぶ」

「了解です。あ、そう言えばリンさんは？」

「リンは別件で出ている」
「なるほど」

それでバイトが必要だったのかな、と思いつながらヒョイヒョイとスタンドからマイク本体を回収していく。渋谷さんは話をそらしたことに突っ込まなかった。まあもともと仕事しに来てるからね。

私の身長は175cmくらいで、女子はもちろん男子から見ても高

めの部類に入る。体格はどう頑張っても腹筋は割れないし筋肉で太くなったりもしないしで細いまま（誠に遺憾）だが、それでも身長に見合うだけの腕の長さがある。おかげで複数台設置されていたマイクはすべて一度で回収できた。

それなりに、しかし私にとつては負担にもならない重量のマイクを運びながら、両手にマイクスタンドを持った渋谷さんと車に向かう。開け放たれているドアを見ながら、もしかしてこの機材全部運ぶのかなと考えていけば、振り返った澁谷さんがなんとも言えない顔をしていることに気が付いた。

「君は……いや、今朝から思っていたが、ちからがあるんだな」

「なんで言い淀んだんですか今」

「いや…」

まあ聞かなくても言いたいことは分かる。さすがの渋谷さんも面と向かって『ゴリラか』とは言つてこなかったが視線が雄弁だった。自覚はあるとも。よく言われるし。ちなみにくちに出した仁王と赤也はしつかりメたよ。

「渋谷さんを抱えて全力疾走くらい簡単にできますよ」

「…はあ…頼もしいな。何か格闘技やスポーツでも？」

笑つて返せば、少し呆れたようなため息をつかれた。しかしそのまま話を掘り下げられたことに思わず目を丸くしてしまった。ちよつと予想外だ。「そうですね」とかで済まされるところだと思つてたよ。

というか、会話術的にそうやって掘り下げれば逆に相手から自分のことを聞き返される可能性が高くなるのは常識。だから必要以上に情報を落とさない渋谷さんが話を広げてきたことに驚いてしまったわけ。

これは、私に心を開いてくれたのか、ただ単に私が思っているよりフランクでフレンドリーな人（当社比）なのか…。

思わず目を丸くしたまま渋谷さんを凝視していれば、次第に渋谷さんの視線が揺れ、逸らされたのち、完全に体ごと背を向けられてしまった。

「……………作業に戻るぞ」

声は固い。怒っているかのようだ。けれど――

「フ、フフフ…」

「マイクを置いてください。旧校舎内に機材を運び込みます」

「渋谷さん」

「仕事をしてください」

思わず笑いながら呼びかければ、そっけない塩対応。これは――
――まさか、拗ねてる？

思うに、渋谷さんが滅多に自分から…いや、調査に必要な分はガツガツいく気もするけどそれとは別に、自分からコミュニケーションをとらないタイプだろう。よっぽど親しくないと雑談や世間話にもならないと見た。

そんな人が、ちよつとした好奇心？ で珍しく質問してみれば『えっ？ 正気？』みたいなリアクションを返されたわけだ。あくこれは申し訳ない。それは私でも逃げる。

しかも相手はその数秒前に『仕事に関係ない話はしません』みたいなことを言っていたという。そして自分が聞いたのは全然仕事に関係ない話。

うーん、これどっちかなあ。うっかりポロつとこぼしちやっただか、遠回しにこれくらいの雑談ならしますって意思表示をしてくれたのか。

うんでも、どっちにしろ私の反応が間違っていたね。いや本当に申し訳ない。…笑ってないよ。本当さ。

「渋谷さん、渋谷さん」

「……………何ですか」

「格闘技は護身術を嗜む程度ですが、スポーツは中学3年間テニスをやっていましたよ。パワーがあるのはそのトレーニングの結果かな」
「……………そうですか」

「当時のチームメイトたちも相当とんでもないのばかりで、まったく手にかかるやつらでした。…少しだけお話ししませんか。もちろん、仕事の支障のない程度で。ね？」

下手に出ながら誘ってみれば、振り向く顔。少し眉間にしわが寄っていて、怒っているようだけど、さて。

多分、渋谷さんの中で私の好感度は低くなかったのだろう。だから多少の歩み寄り？ を見せてくれた。そこに含まれた目的は分からないけど……………そもそも私は、渋谷さんがオカルト業者だと気づく前までは『楽しそうだから話してみたいかも』と思っていたんだ。

「…そんなことをして何のメリットが？」

「私が嬉しい」

切り返した言葉に、渋谷さんが少し呆気にとられたような顔をした。まあこんな事言い返されると思わなかっただろうね。

———実はここが賭けどころ。始まりは渋谷さんだとしても、ここまで推せばそろそろこのお喋りは『私のわがまま』となるだろう。気になるのは、『私のため』でしかなかったそれに渋谷さんがどう動くか。

「荷物を運ぶ間くらいなら大丈夫でしょう」

「……………」

「いろいろありますよ。チームメイトの話、学校の話、スポーツの話…

あ、私ガーデニングが好きなんです、その話もいいですね」

「……………」

いくつか候補を出してさらに切り込んでみる。渋谷さんが大きく息を吐いて背を向けた。おや、失敗かな。

「話は荷物を運びながら。旧校舎内にベースを作る」

「Yes, Sir」

あ、成功だった。ちよつとふざけた返答に、渋谷さんは何も言わなかった。



「ベースの設置場所はここだ。まず――」

「? はい」

「いや。まず棚を設置する。それから、車から必要な機材を運び込む」

渋谷さんに案内されて分解された棚を運び込んだのは比較的玄関に近い一室だった。特別教室だったと思われるそこは当時の机やら備品が残ったままだ。

……こういうのって備品整理しないのかな。今朝の下駄箱だって、さっさと処分してくれてたら危ない目に合わなかったっていうのに。『いわく』つきの学校の備品なんて障りたくないってこと? 怠慢か。

まあ、今回は作業がしやすいからよかったけど。ひとりで少しモヤモヤしていれば、さっそく机の上に棚の骨組みを下した渋谷さんが今後の作業予定を説明する。一瞬の沈黙は謎だが、まあ気にしないことにした。

「そつちを持ってくれ」

「はい……つと、ここ固定しますね」

「ドライバーはそこに置いてある」

骨組みを組み立てるというのは案外重労働だ。これはプラスチックじゃないので重量があるし、ズレると上手くハマらなくてやり直しになるし。

さすがに組み立て初めは会話をする余裕もなく、ふたりもくもくと作業を続けた。

「——実はこういった組み立て作業、初めてなんですよね」

「…どろりで手元が危なつかしいと」

「あはは、でも様さまになってきたでしょう？ 物覚えはいいので」

ひとつ、完成したパーツをあらかたチエックし、問題ないと判断したので次に取り掛かる。ちなみに渋谷さんはさすがに手際が良く、私の倍くらいのスピードで組み立てていた。

ふむ、組み立てにも慣れてきた。…ここはそろそろ、雑談を挟んでもいいだろうか。

「こういったのは……どっちかっていうと指示を出すことの方が多くて」

「……経験則、実体験があった方が指示は出しやすいと思うが？」

おお、のってくれた。少しの驚きと感嘆をばれないように控えめに浮かべた笑顔で誤魔化して、何でもないように会話を続ける。

「私もそう思うんですけど……友人たちがさせてくれないんですよ。危ないからって」

「過保護か？」

「やっぱりそう思います？ 私は全然組み立てたりするの嫌じゃないんですけど……まあ、器用な奴が多いので効率が悪いわけじゃないし、じゃあいいかと丸投げしちゃってたんですけど」

あ、会話途切れた。うっかり。次は何の話題にしようかと考えていれば、組み立て終わったパーツを置いた渋谷さんがこちらを見てくちを開いた。

「：友人、というのは、君に旧校舎の情報をくれたという？」

「ええ。正確には、部活動のチームメイトたちなんですけど」

「そう」

「——情報をくれたのは柳っていうやつなんですけど」

一瞬、また会話が途切れた。しかしわざわざ渋谷さんが話を広げてくれたのだからこのまま終わらせるのも申し訳ない。とりあえず、チームメイトの話をしてみることにする。

「いろんなもののデータを集めるのが好きなのやつで…」

まあ、話題に事欠かない友人たちだ。会話のネタには充分なるだろう。

手を動かしながら、私の自慢の友人たちを渋谷さんに紹介することにした。

さっそく波乱万丈（落ち着く時間が欲しい）

「よーいーしょつと……よし、終了」

「運び込むのはな」

両手に抱えた機材をベースの机におろして一息つけば、すぐさま鋭く切り込みが来た。鋭利だなあ。

機材運搬の間ちよこちよこ話し続けた結果、渋谷さんから遠慮が解けて消えた気がする。これ親しくなったって言う？ いや、うーん、まあいいけど。

「分かっていますつて。にしても、こうもたくさんの機材が並ぶと壮観ですね…これは？」

「サーモグラフィ。温度変化をチェックするためにある。霊が現れると温度が低下するんだ」

「ああ、あの。へえ、実物を見たのは初めてだな…。——あ、テープレコーダーだ。久しぶりに見た」

「基本的に霊障というのは機材と相性が悪い。影響を受けやすく、記録できないことが多い。その中でも、これは確率だが、CDやデータベースに直接入れるよりテープレコーダーのようなフィルムの方が記録に成功しやすいんだ。まあ必ず使うというわけではないが」

「逆に相性がいいんですかね」

ポロリとこぼせば、渋谷さんはキョトンとした顔をした。おや幼い。は赤外線カメラと、高感度カメラ。暗部を撮影するのに使う。と締めくくった澁谷さんは設置した機材をチェックするために背を向けた。

しかし、確かに素人だから教えてくれとは言ったけど、存外丁寧に説明してくれたなあ。いくつかは「別に知らなくていい」とか言っただけで捨てられると思ってたのに。律儀か。

「よし、続きをしましょうか。次は何をすれば?」

「校舎内の各教室の室内気温を計測してきてくれ。デジタル温度計が向こうのテーブルにあるだろう」

「計測地点は入り口ですか? それとも中心?」

「……そうだな。なら……四隅と中心を。黒板に対して右をA、左をB、反時計回りに残りをC、D……中心をEに区分して調べよう」

「専用の様式はありますか?」

「温度家のそばに旧校舎の間取りを確認したセクションペーパーがあるはずだ。そこに書き込んでくれ」

「……セクションペーパー? あ、方眼紙か。あんまり聞かない言い方だな……」

かといって無駄に質問量を増やすとさすがに不機嫌になっちゃうかな。うーん、あえて不機嫌にさせるのも別に……いや、これで関係が気まづくなったらその後が面倒だな。でもほとんど説明を受けてないド素人だからできることもあるわけで……それをふいにするのはもったいないかも?」

「……いや、だめだ。強制労働ならまだしも、これは給料しごとが出るのだから。」

「じゃ、いつてきます」

「………」

「? 渋谷さん?」

「……いや、何でもない」

この人よく言葉の飲み込むよなあ。そのうち追求してみようか……なんてね。

さて、仕事仕事。ひとりで回るのは少し思うところがあるけど、慎重そうな渋谷さんがひとりで行かせるってことは大丈夫——
と思っておこう、うん。

何かあったら労災出してくださいね、渋谷さん。



結果として、特に異常を示した数値はなかった。

「強いて言えば1階の奥の部屋の温度が低いが……」

「うーん、そこらへんはちょうど日の当たらない場所なので別におかしいというほど低いわけじゃないですもんね……」

霊はいないってことかな？ と呟けば、渋谷さんはすぐに「まだわからない」と切って返してきた。いわく、霊はシャイだと。……シャイ。霊が。

なんだろう、ホラー映画とか見ると逆に自己主張が激しいタイプだと勝手に思ってたから、すごい違和感。これがギャップ？

あとなんか渋谷さんがシャイって言うのもちよつと違和感……？ どこことなくユーモアを感じる、ような……？

内心で首をひねっていれば、渋谷さんは続けざまに「心霊現象は部外者が来ると一時的に治まるのが普通なんだ」と説明してくれた。

「部外者、っていうことは、霊にはテリトリー意識があるんですか？」
「おおよそは。死後、現世にとどまっている理由がそれに近いだろう。例えば家、人物、関係性……それが『執着』^{テリトリー}となり魂を縛るといふ説がある。逆に、その説では一般的に言う『浮遊霊』の類は記憶が薄いのか何か道を見失ったのか、自意識や反応が薄いとされているな。執着するものがないから留まらない。しかし道を失っているからどこにも行けず、なのに自意識^{きおく}がないから霊媒のようなコンダクターの声も届きにくい」

僕はこの説は非常に有力なものだと思っている。と言った渋谷さ

んに素直に感心した。この人本当に、業者というより研究者で、マニアっぽい。

それにしても、面白い説だ。…いや、浮遊霊からしてみれば不幸なのかもしいれないけど、聞いている分には講義を受けてる気分で興味深く、面白みを感じてしまうのは無理もない。

「浮遊霊になるのは何か条件があるんですか？」

「例えば？」

切り返し早くないですか。というかここで質問で返すの？ 渋谷さんそれ癖になってるならやめた方がいいよ。って言っているのかなこれ。

「そうだな、例えば『自分が死んだという自覚がない』もしくはそれを忘れてしまっている？ それから…『死因がショックキングすぎて一周回って無気力になった』とか、あ、『心を守るために記憶が消えた』なら生きてる人間でもあり得ることですよ。あとは、生前から『もすぐく強固に自分の殻の中に閉じこもって周りに干渉せず干渉させず』なタイプだったとか？」

「——ふうん」

そこで会話が終わった。

——終わったのだ。

この人、聞くだけ聞いて特に意見も感想も答え合わせもせずに考え事を始めたんだけど。え？ 正気？ さすがの私ものちよつと思うところがあるかな?????

じつと渋谷さんの顔を見ても何の反応もない。ちよつと距離を詰めてもピクリともしない。……鼻がくつつくくらい近づいても気づかない。

心ここにあらざるとばかりの集中度で考え事をしているようだ。

これは仕方ない。考え込むタイプはこうなったら手に負えない。だからそくつ両手を上げて――

バチンツ!!

「っ!?!」

「はい渋谷さん、指示をくださいね。次の私のお仕事は何ですか?」

――渾身の『猫だまし』を試してみた。

渋谷さんはまさに猫のような動きで飛び上がった。え、何そのリアクション。面白すぎでは?

思わずウズウズツと好奇心がうずいたが、何食わぬ顔で仕事を求めれば、まあ恐ろしい顔で睨まれた。

「――1階と2階の廊下に4台、玄関に1台。暗視カメラを設置しろ」

声ひつく。ああだめだ笑うな幸村聖子。ここで笑うと渋谷さんの機嫌がマントルを超えるぞ……うん、でも分かってきた。露骨なリアクションを見られたのが恥ずかしかったんですね。で、恥ずかしさが苛立ちになったと。

「早くいけー!」

はいはい仰せのままに。……ふふ、やっぱり渋谷さんは楽しいな。

え? マイクの件でバカにされた仕返し? まさか、そんなことないさ。……あはっ!



「終わりましたよ渋谷さん。具合はどうですか？」

「問題ないだろう。設置が終わったのならもう今日は帰っていい」

「了解です。……それにしても、ゴーストハンターって言うよりテレビ局って装備ですよ。想像してた霊能者とはちよつと違うんだなあ」

「霊能者じゃない、ゴーストハンターだ。一緒にするな」

カメラを設置し終えたころには渋谷さんの御機嫌も元通りだったので、ちよつとした雑談を挟んだら飛び込んできた否定。え、違うの？

まあ確かに例のTさんみたいに「破アアアアアーツ!!」ってタイプには見えないなあ。霊能者って言われたらそんなイメージだし。

「あ、もしかしてタイプのには『研究者』ですか？」

「……………『検証者』という表現も当てはまるかも。まあそういったものだ」

まあまあ納得したように頷いた渋谷さんは、私がとったデータを見ながら「明日の放課後もできるだけ早く来い」と言って背を向けた。わあ淡泊。そういうのは顔見て言おうよ渋谷さん。まあ、いつか。じゃあ、と渋谷さんに声をかけようとしたら、急に本人が振り向いた。はて、何か伝え忘れだろうか。

「さようなら」

……………えっ。

え、いま渋谷さんが「さよなら」って言ったの？

まってこの人ほんとに面白いな。

「ええ、また明日」

やばいなこのバイト本格的に楽しくなってきた。とりあえず声も顔もにやけないようにだけ気を付けて、逃げるように旧校舎を出る羽目になったことを報告します。

危ない危ない、大笑いするところだった。

■

帰宅してバイトの話をしたらボウヤの機嫌が死ぬほど悪くなった
んだけど。

ほんとこの居候先も面白いね。ボウヤそのドスの利いた声どこか
ら出してるの？

「ちよつと聞いてんの」

「待って笑いすぎてお腹痛いんだ」

「そのまま筋肉痛になれば!!」

■

次の日登校すれば、まあ当然のように恵子ちゃんたち3人に質問攻
めされた。勢いが……すごい……困まれて、逃げられない。完璧なコ
ンビネーションだ……。

まあでも、ミチルちゃんと祐梨ちゃんとの壁がどことなく薄くなっ
た気がするからプラマイプラス？ 渋谷さんにはちよつと感謝して
もいいかもしれない。

「あ、そうだ。あのね、渋谷さん転校生じゃないそうだよ」

「二」 えっ!?! 「二」

「校長の依頼で旧校舎の調査に来た業者さん」

詳細は話さない方がいいかもしれないけど、この誤解は解いておい

た方がいいだろう。流すようにぼかして伝えれば、3人は目を見開いて驚いた。

「そうなんだ……残念だね、幸村さん」

—— うん？

「そう、だね？」

—— あ、

まって。そうだ。そうだ—— 私、まだ誤解されたままなのか！

あーっ適当に返事をするんじゃないかなかった……3人の顔が、なんか、キラキラしてるような……私全然残念じゃないんだけど？

だめだ。今度こそ誤解を——

「ちよつと、幸村さん」

—— 解がなくちゃ、いけないのに。

「あの人、霊能者なの？ 旧校舎を調べに来たって聞こえたけど」

へえ、昨日の今日でよく話しかけてくれたね、黒田さん。若干腰が引けるように見えるけど、案外度胸があるなあ。そこだけは評価してもいいよ。褒めてないけど。

「彼の仕事は『検証』・『調査』だよ。少なくとも、君が想像しているような『お祓い』・『退治』ではないと思うけど。あくまで旧校舎を解体するのに旧校舎を調べに来ただけ」

それにしても、相変わらず睨まれてるなあ。—— うつとおし

い。

黒田さんはずっとギラギラして目で私を睨んでる。心なしか昨日より鋭そうだ。

申し訳ないけど、私は君のことが好きじゃない。そして、私は結構自分本位だ。自覚がある。だから————気に入ってる人に気に入らない人間が近づくのはシンプルに嫌。それが、迷惑をかけられそうならなおさら。

「彼は校長の依頼で来た業者だよ。そしてその事務所の所長だ」

『紹介してほしい？』『霊能力があるから役に立てる？』 ああ、どうでもいいよそんなこと。

「君は昨日散々、渋谷さんに霊能力をアピールしてたじゃないか。必要だと思ったら直接君に声をかけるだろうさ。それでも声がかからないのなら、彼の仕事に君は必要ないということだ」

「っそんなのわからないじゃない！ 私が居れば、」

「そうだね、分からない。けれど、必要かどうかを決めるのは責任者である渋谷さんだ。渋谷さんは現時点で君に声をかけてない。それが今のすべてじゃないかな」

「あなたじゃ話にならないわ！ 私が、私が——」

「——『私が』、何？」

君はずっと、自分の事ばかりだね。その思考自体は別に嫌いじゃないよ。ただ、君が嫌いだ。

「一応言っておくけど、彼は正式な仕事で来ているのだから、営業妨害はしないよね——それから」

これは、言わなくていいことかもしれないけど。たぶん、彼女を深

く傷つけるかもしれないけど。

それでも私は君が嫌いだし、そもそも突つかかってくるのは君だ。そっちが何もしなければ、私だって自分から嫌いな人間に話しかけたりしないのにさ。

「目立ちたいのか知らないけど、私を巻き込むのはやめてくれ。君の自己中は不愉快だ」

自分が居ればどうにかなるといふのなら、さっさと除霊なりでもすればいいじゃないか。昨日できるとか言ってたしさ。

そこまで言えば黒田さんは数歩後ずさり——それでも私を睨みつけてから自分の席へ帰っていった。

ふん、と小さく鼻を鳴らす。客観的に見れば言い過ぎかもしれないけど、彼女に優しくする理由が私にはない。

ああ、気分が悪い。

「幸村さん、大丈夫？」

「あ

——やってしまった。

ドバっと背中中に冷や汗が流れた。やばいやばい。

「あ、ああ、大丈夫だよ。ありがとう」

声は引きつっていないなかっただろうか。ああ、思い切り3人の前で黒田さんに口撃してしまった。うわあ、引かれてないかな…

「あいつ中等部のころからアブナイって言われてたんだよ」

「うん、あたしも黒田さんも内進組なだけどさ、ずっと『私には霊能力があるの』って言ってる…」

「すぐ怒るから怖くてさあ…言ってることもわけわかんないし。あつ、でも今の幸村さんのはスカツとしちやったなあ！」

パツと明るい笑顔で恵子ちゃんが笑ってくれる。よかった、引かれてないらしい。

にしても、この様子だと彼女の自己主張に周りはフラストレーションが溜まってるってことかな。まあ昨日の様子を見る限り上から目線で説教臭くマウンツとつてくるタイプみたいだから、周りからしたらウザったく思うか。

3人が代わるがわる教えてくれた情報によると、少なくとも1年以上あんな感じってことだよな。

——彼女の靈感が本物なのかは分からない。正直興味もない。けど、昨日の様子からして『ごっこ』だろうなあ。あれだけ渋谷さんに論破されてたし。

ま、赤也も昔「俺幽霊見たんスよお〜」とか「ぶつちやけお化けとが出てワンパンキルよゆーでしょ！ マジ俺の方が強えーわw」とか調子に乗ったこと言ってたし（そして散々仁王と丸井にからかわれて泣いてた）。それに近い感じなんだろう。つまりただの妄言。

ただ気に入らないのは、彼女が私に敵意を向けてくること。それが気に入らない。そしてその気に入らない人間に巻き込まれること。ほんとうに、嫌。

「——さ、もうすぐチャイムが鳴るかわ座ろうか」

どれくらい嫌って言うと、話題に出るのも嫌。



放課後、制服からジャージに着替えて旧校舎に向かえば、渋谷さんは車の中で機材とノートパソコンをいじりながら作業をしていた。

「こんにちは」

「ああ、——」

「……なにか?」

「いや、何でもない」

また飲み込んだ。うーん、どうしようかな、突っ込もうかな。……正直、昨日のリアクションからしてなんとなく何を飲み込んだのかは検討が付いてるんだよなあ。

多分突っつくのは楽しいだろうけど……

「何か進展はありましたか?」

「いや、昨日集めたデータのチェックをしたが、特に異常は見られない。霊がないのか今は息を潜めているのか……どちらにしろ、やはり危険性は低いだろう」

まだもうちょっと大人しい優等生でいようか。

渋谷さんのパソコンに表示されているデータ値を見せてもらいながら説明を聞いていれば、ふと足音が聞こえてきた。

「——渋谷さん、お客様みたいです」



「へえー! いっぱしの装備じゃない」

やって来たのは若い男女がひとりずつ。……知らない人だな。見た目からして、教師には全く見えないけど。関係者だろうか。

……この機材を見ての感想がソレなら、ふたりはこの調査が何かを知っている? なら調査の進展を確認しに来たのだろうか。それにしても、第一声の感じが悪い。声には見下したような色が見て、こう

言ったら失礼だろうけど、嫌みな女の典型例みたいだ。

「子供のオモチャにしては高級すぎるカンジねえ」

「…あなたがたは？」

鼻で笑ったような声。『子供のオモチャ』？ 分かりやすいくらいの嫌みだ。

——もともと今朝の黒田さんのせいで、あまり機嫌がよろしくなかった。追い打ちをかけるような嫌みに思わず眉が上がる。

しかしさすがの渋谷さん。さらりとした声とポーカークーフエイスでの対応に、相手の女性は少し笑みを浮かべて自己紹介をしてきた。

なるほど、この程度の嫌みはどうってことないとお見事。

「アタシは松崎綾子。よろしくね。ボウヤの名前は？」

「あなたのお名前には興味ないのですが」

前言撤回。嫌みには嫌みを返すタイプだった。

ひくり、と松崎さんとやらのくちの端がひきつる。自己紹介してそんなこと言われるとは思わないだろうしね。ははは、面白くなってきた。

「おキレイな顔だからって随分生意気じゃないボウヤ」

「おや。僕の顔がキレイだと？」

「なによ」

「いいえ、趣味は悪くないんだな、と」

「ふはっ」

——名も知らない男の人とハモリながら吹き出してしまった。

いや、でも、これ仕方ない????

思わず男の人と目が合った。

そっちの坊主は良い性格してるな、と目で言われた気がしたので、そうでしょう、と頷いておく。男の人はニンマリと笑う。あ、この人多分楽しい人だ。

「なっ、なっ、つこの……!! とんだナルシストね! いいわよ、あたしだってアンタの名前になんか興味ないわ! あんたなんて『ナル』よ『ナル』! ナルシストの『ナル』!!!」

わあ、松崎さん大噴火。——それにしても、『ナル』。それって渋谷さんのあだ名じゃなかったっけ。すごい偶然だな。……さすがに元の『ナル』の語源はナルシストじゃないだろうし。……違うよね?

渋谷さんもさすがに驚いたのか、ギョツとした顔をして松崎さんを見てた。その顔はどっちだろう。そんな失礼な理由であだ名をつけたことか、偶然にも自分のあだ名と合致していることか。

なんにせよ、氷の面のだった渋谷さんの表情が崩れたことに松崎さんはいたく満足したらしい。高笑いしながら「かわいいじゃない、ねえ、ナル!」と煽り始めた。うーん、自分が有利になると調子に乗るタイプか…可哀そうに。相手が渋谷さんじゃなければ、まだ傷は浅かったと思うけど。

一歩、渋谷さんから離れる。

「——松崎さんは『同業者』ですか?」

「ま、そんなところかしら? アタシは巫女よ」

「へえ」

「……………なによ」

え、巫女? 思わず松崎さんの顔をまじまじと見てしまった。巫女って言ったら神社仏閣に居るような巫女さんを想像するんだけど——あんまり見えないな。

その場の視線が無言で自分に集まった上に、渋谷さんも含みを持た

せたような相槌を打ったものだから松崎さんの不快ボルテージが上がったのが見て取れた。声が3オクターブくらい低くなってる。

この先を想像すると少し松崎さんが哀れにも思うけど、まあ最初に仕掛けたのは松崎さんで。好感度はかなり低いのでフォローする気はありません。

渋谷さんは恵子ちゃんたちに見せていたものの10倍くらい輝く微笑みで、松崎さんに吐き捨てた。

「巫女とは清純な乙女がなるものだと思ってました」

——分かったことがある。渋谷さんはどうやら嫌みに使う笑顔を作るのは苦でないらしい。まあ輝かしいことで。：本当に物理的に輝いて見えてきたな。

しかし笑顔に対して雰囲気は冷気を感じくらい冷たい。離れてよかったよ、ジャージだけだと厳しかった。

ちなみに私は今回は吹き出さなかったが、男の人はずいぶんとツボが浅いらしい。腹を抱えた大爆笑。

「ああらそう見えない!?!」

「少なくとも乙女と言うにはお年を召されすぎと思いますが」

ありや、年齢の話を出しちゃうか。相手への有効打の見分けが鋭いなあ。

「あっはっはっはっは!! それに清純というには化粧が濃い!!」

凶星か怒りかですっかり言葉が出なくなってしまった松崎さんに、男の人は追い打ちのような援護射撃を浴びせてきた。わあ、デリカシーが死んでる。同情はしないけど、さすがに女性の年齢や容姿について言及しすぎるのは……この手の話題は過ぎるとこっちが悪役だ。

まあ特に庇うつもりはないけど。

「図ったのか図らずか渋谷さんの援護をした形になった男の人に、それでも渋谷さんは容赦しないらしい。」

「あなたは？ 松崎さんの助手ではなさそうですが」

「はは、冗談だろ？」

「今この場で完全に松崎さんがヒエラルキーの最下層に墮とされたことを理解した。うーん、自業自得かな？ まあケンカを売る相手は見極めた方がいいですよ。特に渋谷さんみたいなのは相手取るにはリスクが高すぎるんですから。」

「俺は高野山の坊主で滝川法生ってんだ。おっと、名前には興味がなかったか？」

「高野山では長髪が解禁になったんですか？」

「はん、破戒僧じゃない」

「だーっ！ 今は山を降りてんだって！」

「経歴詐称じゃないですか」

「えっ、あーっ、言葉の綾みたいなものだよっ」

「キレッキレの渋谷さんに、今度は松崎さんが援護射撃を繰り出した。まあ間違はなくさっきの仕返しだろう。おそらく男の人、滝川さん？ も理解したのか、『今度はそっちがタッグ組むのか』！ という顔になった。しかし残念。おふたりが勝手に援護しただけで渋谷さんはどっちとも組んだつもりはないと思いますよ。」

「ついでに、私だけちよっと蚊帳の外になっていたので参戦してみました。経歴詐称は犯罪ですよ、お兄さん。うん、そんな『裏切ったな』みたいな顔されても、ねえ？ だってあなた、松崎さんがご機嫌に話してるとき私たちも含めて割と見下した顔してたでしょ。見えてましたからね。」

「とにかく！ 子供の遊びはここまでよ。こっからはお姉さんに任せない」

分かりやすいくらいさっきの渋谷さんのセリフを意識してるな。

松崎さんは、渋谷さんには負けたが自分を笑った滝川さんに一撃を与えたことで調子が戻っちゃったらしい。また見下したような声で、「校長はあんたじゃ頼りないんですってよ。いくら何でも17じゃあねえ」と笑った。

そして滝川さんも「そーそー！ 渋谷なんてえ一等地に事務所を構えてるってんで信頼してたのに、所長があんな子供じゃサギだって言ってたぜ」と笑った。

—— ああ、嫌な話だ。ほんとうに、気分悪いな。

すう、と表情が抜け落ちるのが分かる。「あの校長も大ゲサよねえ」と続ける松崎さんから、体ごと視線をそらした。

振り向きざまに一瞬見えた滝川さんの、目を見開いた顔は少し気になっただけ。

「渋谷さん、今日は何をしますか？」

渋谷さんはちらりとこちらに視線を向けた後、反応がなさ過ぎて手の打ちようがないな、と呟いた。

松崎さんの大きなひとり言を無視する形になったけれど、松崎さんが何かを言う前に滝川さんが渋谷さんに話しかけた。

「そーいやボウズ、名前はなんてんだ？ オニーサンは興味あんだよなあ、な・ま・え」

「渋谷一也といいますか」

「ふん、聞いたこともないわ。三流じゃない」

「おっと、俺は松崎ナントカなんて名前も聞いたことないぜ」

「あーら勉強不足じゃないかしら！」

喧々と続くふたりの喧嘩。けど――
気のせいだろうか。……今、滝川さんに、フォローされてた……？
確証はないが感じる違和感に、思わず考え込んでしまう。彼の中で
何があったのか、と視線を向けてところで――その背後に、見
たくもないものが入った。

「ああ――いや、そうかこれは」

「どうした」

「すみません渋谷さん。……面倒ごとを、呼んでしまいました」

「何……」

「ああ！」

――歓喜に震える声が響く。見れば、見たくもなかった……
黒田さんが、松崎さんと滝川さんに話しかけていた。ああ、本当に、今
日こそ厄日か？



「よかったわ、旧校舎は悪い霊の巣で私困ってたんです！」

こちらからふたりの表情は見えないが、どことなくに気が固くなっ
た気がする。対して黒田さんはなんとも幸せそうな顔だ。――
その目が、一瞬私をとらえて、悦に歪む。

――ほら、どう？

そんな、顔だ。ああ、気分が悪い。

「……あんたが、どうしたって？」

「私霊感が強くなって、それですごく悩まされ——」

「自己顕示欲」

はは、お見事松崎さん。……渋谷さんも言わなかったよ、そこまでは。

松崎さんにかぶせるように靈感アピールを始めた黒田さんは、松崎さんの冷たい声にかぶせ返され止められた。

そして松崎さんは、さつきまでとは考えられないくらい冷たい声で黒田さんを切り捨てた。

刃のように鋭い切りくちで黒田さんを傷つける松崎さんは、いっそ感情を感じさせないほど固い声だった。——このリアクションを、私は理解できる気がする。

ああでも、そうだと言うのなら。松崎さんは本物なのだろうか。……いや、判断材料が足りないな。

滝川さんは松崎さんの物言いに呆れたような溜息を吐いていたけれど、松崎さんを止めはしなかった。……あれだけ仲が悪かったのに？ 話に割り込みそうな滝川さんが。

あまりにも冷たい物言いに、どんどん黒田さんがうつむく。——

——同意してくれると思った？ 彼女はこの人たちを本物だと思って来たのだろうか。本物に認められれば満足できると思ったのだろうか。馬鹿だなあ、本物なら、なおさらバレるだろうに。それとも、偽物だと思ったからノってくれると思った？ ……自分と同じように。

「面倒ごととは彼女か」

「はい。今朝、渋谷さんは霊能者かと聞かれたので誤魔化したんです。けど『靈感がある自分は役に立つはずだ』と紹介を迫られて」

「断ったんだな。が、それでは引かなかった」

「そう。そして、まあ、私もちよつとカツとなりまして。言い合いのようになり……」

「『できるのなら除霊すればいい』、とでも言ったか？」

「その通りです」

うかつだった。あの場でもっと穏便にお引き取り願えばよかった。昨日の今日で気が立っていたからって、自制せずに好き勝手した結果がこれだ。やりくちを間違えた。選択肢を誤った。ああ、くそ。まさかこんな形で人に迷惑をかけるとは。調子に乗っていたのは、私だ。

「——— だったら!! その子はどうなのよ!!」

噛みつくように、黒田さんが私を指さした。視線が私に集まる。――

——— そうだな、自己嫌悪は後だ。

ゆつくりと、腕を組む。重心を、片足へ。それだけで傍目から見れば尊大な態度に見えるだろう。

「どうもなにも、私はアルバイトさ。校長先生から許可ももらっているから、私がここに居ることは何らおかしいことじゃない。———
——— 君と違ってね」

ゆつくりとした動作は余裕がある、と認識されやすい。一種のポーカーフェイスだ。

今ここで必要なのは、黒田さんを反論の余地なく撃退すること。……今後の対策は後で考えるところとして、今は早くこの部外者を追い出さなくてはいけない。

「なによ——— なによ! ——— なによ! ——— なによ! ———
いつも、アンタばっかり!!!」

「黒田さん、言ったよね。君が必要なら声がかかるはずだって。勝手なことをして仕事で来ている人の営業妨害をするなって。同じことを2回も言わされるのは好きじゃないんだけど———」

黒田さんは息荒く睨みつけてくる。獣みたいな目だ。けれどそんなもの、痛くもかゆくもない。

「君の自己中は不愉快だ」

しいん、と場が静まる。あーあ、これはさすがの渋谷さんにも引かれちゃったかな。

でも黒田さんがここに来た一端は私にあるようなものだから、後片付けはしつかりしとかないと。

黒田さんは少しうつむいて、むつつりと黙り込んで、そうしてポツリとこぼした。

「アンタ、本当に嫌い」

「奇遇だね、そこだけは気が合ったみたいだ」

嫌みを返してみたんだが——黒田さんはまるで聞こえていないかのように無反応で、代わりに松崎さんを睨みつけて「私を馬鹿にしたこと、今に後悔するわニセ巫女。霊を呼んでアンタに憑けてやる」と吐き捨て去っていった。



「——あ、あゝ、そーいや嬢ちゃん、会話からしてこの学校の生徒か？ 着てるジャージは違う学校みたいだけど」

黒田さんが去っても場はどこか気まずげな雰囲気が残っていた。ま、頭おかしそうなのと態度でかいのの喧嘩なんて面白いものじゃないしね。しかも私も黒田さんもお互いに強い口調で言い合ったから、引かれたかもしれないな。

しかし、空気を換えることを狙ってかすぐに滝川さんが当たり障りのなさそうなことを聞いてきた。おや、やっぱりフォローしてくれて

るのかな？ うーん、根は面倒見がいいと見た。

で、私の格好についてか。まあ違う学校の名前入ってるジャージだからね。深緑のそれを少し引っ張ってみる。

「中学の時の指定ジャージなんです」

「ほお？ ああ、旧校舎なんて汚れるもんな。使わなくなったやつの方がいいか」

「まあそれもあるんですけど——実はうちの学校、いまだに指定体操服がブルマなんですよ」

「はあ!？」

ペロリとこぼせば、松崎さんまでも食いついてきた。うんうん時代考えろって話だよね。でもこんな田舎じゃ、止むに止まれぬ事情がありました。

「元PTA役員団体と、毎年大ぐちの寄付金をくれる老人会の方々から『伝統が』『風習が』ってクレームが入るみたいで。老いた害悪とはよく言ったものですね」

田舎じゃ一般世論より強い人がいるのだ。こればかりは学校単体ではどうしようもないうえに、教育委員会もうかつに手を出せない。なにせ地域の有力者ばかりだ。

それでも、世間一般から廃止されて10年以上たっているつのに。

「さ、渋谷さん。仕事をしましょう。結局今日はどうします?」

「……そうだな、怪談に出てきた人影があったという教室に機材を設置してみるか」

「ああ、2階の1番西側ですね、了解です」

ふたりとの話は簡潔に切り上げ、渋谷さんと仕事の打ち合わせをす

る。意識を切り替えてさあ仕事だ、と機材を持ち上げたところで、またもや来客が到着した。…一気に来てくれればいいのに。ちよこちよこ作業を止められるのはストレスだ。あ、どうやら今度は校長もご一緒の様子。

「やあ、おそろいですなあ。実はもうひと方お着きになりましたね、ジョン・ブラウンさんです。まあ仲良くやっってくださいよ」

今ひと悶着あつたばかりですが。本人たちの性格的に壊滅的そうですが。…とはさすがに言わないけれども、校長先生はずいぶんと人を集めたな。巫女に、坊主に、ゴーストハンターに、今度は感じの良さそうな美少年か。うーん、偏見だけど、聖職者かな？ 外国人だし。…それにしても、なんか、顔がいい人が多くないか？ まさか校長の趣味じゃないよな。

ブラウンさんにはっこりとわらって深く頭を下げてくれた。おお、礼儀正しい――

「もうかりまっか」

わあ。

「ブラウンいいいます。あんじょうかわいがつとくれやす」

「その、ブラウンさんは関西の方で日本語を学んだようで…」

大人ふたり組は早々に決壊した。校長は逃げるように帰っていったが、ブラウンさんは『おおきにさんどす』とまた頭を下げていた。うーん、方言にはびつくりしたけど、態度を見れば好感度高くなるな。この人もしかしたらこの場で一番まともなんじゃないか？

「…ブラウンさん？ どちらからいらしたんですか？」

「へえ、ボクはオーストラリアからおこしやしたんどす」

「おいボウズッ！ たのむからその変な京都弁やめてくれっ！」

さすがに渋谷さんも善人オーラが溢れるブラウンさんをこき下ろす気はないらしく、いくらか柔らかい口調で話しかける。おお、レアだ。

それにしても大人たちは笑いすぎでは？ 「せやけど丁寧な言葉いうたら京都の言葉とちがうのんどすか？」と純真な顔をしているブラウンさんに、これ以上大人が失礼なことを言わないように先回りすることにした。なにせまともそうで、すごい善人オーラを感じる人だ。多分ジャツカルに近い。それに、彼には笑われる謂れはないだろう。

「ブラウンさんは京都の言葉が丁寧語だと思ってたくさん勉強されたんですね」

「へえ、郷に入らば郷に従えて聞ききましたん。失礼のあらへんように一番丁寧な言葉を習うたつもりやったんどすけど」

「とても素敵ですね」

「そ、そうですやろか」

ほわ、と嬉しそうに笑ったブラウンさんに、ようやく大人たちも笑いが収まってきたらしく、息を整え始めた。遅い。

「説明すると、京都の言葉は方言なんです。イギリス英語やアメリカ英語みたいな違いというか…現代日本では『訛り』になるんです」

「そうやったんどすか…あのボクはあんさんらに不快な思いをさせようたのでっしやるか」

「いいえ、まったく」

おっと、そこだけは否定しておかなくては。少し不安そうなブラウンさんの言葉に素早く否定を入れておく。まったく、いい大人が腹を抱えて笑うからこんな誤解がされるんだ。

「そもそもブラウンさんは丁寧な言葉だと思って勉強されたんでしょう？ それに、京都の言葉だつて立派な日本語ですよ。特に京都では誇る人も多いでしょう。——日本人なんてほとんど片言の英語もしゃべれない人が多いのに、ブラウンさんはすぐく流ちような日本語ですよ。尊敬します」

あなたたちのことですよ、おふたりとも。ぴつたりと息を潜めたあたりでふたりとも母国語の人に笑われないような英語喋れるわけじゃないでしょう。それがひとの日本語は笑うのだから、どっちが笑い者なのか。

ブラウンさんはほんの少し頬を染めて、控えめに頼みごとをしてきた。

「そやったら、その、ボクの言葉変やったら教えてもらえまへんか。ちよいとでもええさかい」

「喜んで」

あ、即答しちゃった。……そつと渋谷さんを窺ってみただけどうやらお咎め無しのようなのだ。これはブラウンさんが渋谷さんのお眼鏡にかなったのかな？

「えっと、あんさんらとは仲良うさせていたただきたいんですけど、あんさんらは全員霊能者ですか？」

言い終わって、ブラウンさんはちらりと私を見た。あ、その場で添削していいのこれ。肝が据わってるといふか、器が広いといふか。

『あんさんら』は『みなさん』に直す、くらいでいいんじゃないですか？ せっかくの京都弁ですし、程よく残しましょう。親しみもわかりますから」

とういかシンプルに京都弁のブラウンさんが癒される。いいなあ、今日疲れることばつかだつたから、ちよつとすつきりしてきた。

渋谷さんはブラウンさんの質問に、ちよつと苦笑いして「そんなものかな。…君は？」と聞き返した。

わ、やつぱりブラウンさん渋谷さんに気に入られたらだろこれ。私には「一緒にするな」って言ったのにこれだもん。すごいなブラウンさん。

「へえ、ボクはエクソシストいうやつでんがなです」

——ふと、空気が少し張り詰めた。エクソシスト…悪魔祓い？ へえ、初めて本物を見たなあ。あれ、本物なのかな？ …まあいいか、癒されるし。

それにしても、私以外の3人の、ブラウンさんに向ける空気がちよつと鋭いなあ。

「相槌や返事は『へえ』より『はい』の方がいいかと。それから、『でんがな』はない方が自然かな」

「えつと、はい。なるほど…」

空気なんて気にしないのでサクツと添削すれば、ブラウンさんは素直に受け入れてくれる。人間ができてるなあ、すごい勢いで株が上がつていく。

「エクソシストということは、ブラウンさんはカトリックの司祭以上、ということかな。ずいぶん若い司祭だね」

「はい、ようござ存じで。せやけどボクはもう19です。若う見られてかなんのです」

わあ年上だつた。ええ…向こうの人って老け顔なんじゃないの？

こんな…童顔…真田の立場がないな。

ちなみにブラウンさんには指でオツケーマークを付けておく。添削しすぎるとブラウンさんのせつかくの癒し効果が半減しちゃうからね。すごい、自分好みに美少年をカスタマイズしてるぞ私。



さて。じゃあ仕事に、と渋谷さんと私、そして心を開いてくれたブラウンさんがベースに向かえば、なぜか松崎さんと滝川さんがついてきた。なんで？ 寂しがり屋か。

「Come to think of it, I didn't hear
Can I ask you?」
「It's Seiko Yuki.
I, my younger, so
you can take it easy.」

私とブラウンさんは大人ふたりに構わず会話をすることにした。……本当は日本語でたくさん会話した方が彼の練習になるのだろうけど、遠いオーストラリアから来たのなら故郷の言葉の方が会話がしやすいのではないかというお節介だ。

「Won't you speak for a minute?」
と話しかければブラウンさんは少しリラックスした表情になったので、やっぱり安心するのだろう。うん、ちゃんと勉強しててよかった。私もイギリスやシンガポールに行ったときは日本語で話してくれた現地人に安心したなあ。味方感があるのかな。

「If I said that,
you are supposed to
study Japanese, so
it's equivalent to a teacher.」

あなたこそ気軽にしゃべってくださいます。

おつと意外、頑なだなあ。

「Since I am able to practice my English in this way. You are equivalent to my teacher. So...we're equal.」

歩きながら手を差し出せば、ブラウンさんはすぐに意図に気づいてくれたらしい。柔らかい嬉しそうな微笑みで、その手を取ってくれた。

「I want you to introduce yourself again. I'm John Brown. Please call me John. I want to be friends with you. That's a strange chance, too. I'm Sei. That's Yukimura. Call me "Sei".」

126

歩きながらの握手はすこし難しいが温かく、私は癒し系の友人をゲットした。



ベースの道中はジョンとの話が弾んだが、渋谷さんは咎めなかった。やっぱりこの人ジョンの事気に入ってるな。

ちなみに大人ふたりは随分とまじまじ私とジョンを見てきたけど、特に何も言われなかったし、視線にも剣呑なものはないので気にしなかった。

会話は楽しかった。ただ、さすがにベースに着けば私もジョンもおしやべりを止め、仕事モードに入った。うん、ここで察してくれるなんていい友人だ。

ちなみにベースに所狭しと並んだ機材を見た松崎さんと滝川さんはギョツとしていた。まあそうだろうなあ、壮観だし。

けどジョンはそこまでリアクションがなかった。うーん、海外じゃあまり珍しくないのかな。

「じゃあ2階に機材運びますね」

「ああ。…それから、例の教室の真下、1階の1番西にも設置してくれ」

「了解です、ボス」

増えた仕事に、人使いが荒いなど苦笑いしてしまう。パソコンに向き合った姿を見れば手伝う気は全くないことが察せられるわけで。まあそれが私の仕事だからいいんだけど。

「I, I'll help you.」

「It's okay. it's easy.」

ひよいひよいと機材を持てば、ジョンが手伝いを申し出てくれた。ありがたいけど、そこまで大変じゃないから断る。ジョンはちゃんと仕事で来ているんだから、本業に集中してもらわないとね。

「持っていけ」

「インターカム？」

「そう」

ほい、と渡されたのはコンパクトなインターカムだった。通称インターカム。つまり通信機。渋谷さんの耳にも同型があるから、連絡無線か。使い方を軽く説明した渋谷さんは、くるりとまた背を向けてし

まった。ま、人もいるし仕事中だからね。特に私も雑談するつもりはなかったけど、……なんか渋谷さん、ちよつと雰囲気固いな？ まあ面倒ごとがたくさん起こったから仕方ないかな。一端は私も担っちゃってるし、ここは素直に反省します。」

「行つてきます」

「——ああ」

渋谷さんに声をかければ、そつけないが返事を返してきた。——

——そつけないが返事が返ってきた。わあ。雰囲気固いと思つたのは気のせいだった？ いやそれにしても、やっぱり楽しいなこの人。

「あ、ちよつと！ ひとりで出歩くんじゃないわよ！」

「Be careful.」と手を振ってくれたジョンに手を振り返してベースから出れば、なぜかギャンギャンと怒った松崎さんが着いてきた。いわく、まだ安全じゃない、こんなボロボロな建物で女の子がひとり歩きするなど。……ええ？ 松崎さんも根はお人好しタイプ？ 態度の悪い人が実は味方側なんて展開は滝川さんの二番煎じですよ。」

奇々怪々のファンファーレ（揃った盤上）

ベースを出ていくらか歩いた先、重たい機材を2階へ運び込んで（担ぎながら階段を登っていたら松崎さんに理解できないものを見る目で見られた）設置し、さあ次は1階へ、と移動したあたりでそれまで沈黙を保っていた松崎さんに話しかけられた。

その間後ろをついてきながら特に手伝うでもなく、きよろきよろしたり建物の埃っぽさに文句を言ったりじつと見つめてきたり、正直「この人何しに来たの」って感じだったから気にせず放置していたんだけど…さて、結局何の用だろうか。まさか本当に心配だからついでにきただけってわけでもないだろうし。

「ねえ、アンタここの生徒なんでしょ」

「そうですよ」

「なんでこんなバイトしてんのよ」

——おや？

「うーん、ご縁があつて渋谷さんと知り合つて、今回の仕事を手伝わないかと声をかけられたので？」

うん、嘘は言つてない。

ちよつとぼかしたように伝えれば、松崎さんの眉間には…わあ、立派な富士山。

「アンタね、——はあ、いいわ。言つたつて仕方ないわね」

「というど？」

「だから、……あーもう！ いい？ よく聞きなさいよー！」

ふん、と顔を反らした松崎さんにわざとらしく続きを促せば、思い

のほかすぐに釣られてキレ気味にくちを開いてくれた。

キーン、と高めの声が教室内に響く。さつきから思ってたけどこの人かなりちよろいよなあ。

「アンタみたいな素人には考えつかないかもしれないでしょうけど、こういった幽霊退治の仕事は子供のお遊びのノリと違って危険な仕事なのよ」

「なるほど？」

「幽霊にも種類があつて、まあ今回は詳しい説明は省くけど：ヤバイやつはこつちを攻撃することのためにためらいがないわ。聞いたことあるでしょ？ ポルターガイスト。普通の人間じゃ敵いつこないような理不尽なちからでこつちに害をなしてくるのよ。下手すりゃ死ぬわ」

「ふむ」

「それに霊能力者には詐欺師が多いもんなのよ。そういう馬鹿ができもしない除霊だのに手を出すと、だいたいは全く効果はないけど、たまに小石程度に霊を刺激しちゃう場合もあるの。そうしたら『反発』

—— 霊が反応してカウンターで殴り返されたりするのよ。無害だったやつでも一気に活発化して攻撃的になって、余計に被害が悪化する！」

「へえ…」

「運良く霊からの攻撃がなくても、…言った通り、詐欺師の多い界限よ。除霊と銘打ってバカみたいなのをしようとするやつもいるわ。ただ無力な年寄りや、こういう仕事に好奇心で突っ込んできちゃうよな、世間知らずの若い子なんて特に被害にあいやすい。しかもアンタみたいな見た目のいい若い娘なんて格好の獲物よ」

「ああ、そういう」

「悪いことは言わないわ。—— 手を引きなさい。取り返しのない傷を負う前に」

—— ずいぶんと、まつすぐ目を向けられた。

さつきまでの小馬鹿にしたような態度とは違う、あまりに真摯な瞳

だった。

なんだ、やっぱり二番煎じじゃないですか。

「……………なにニヤニヤしてんのよ」

「うーん」

きっとよほどひねくれていない限り、今の松崎さんの言葉の意味は誰だって理解できるだろう。松崎さんは私のことを心配して、渋谷さんを警戒している。

出会い頭でイヤミを言って、ベースまでついてきてまたイヤミを言って、小馬鹿にして鼻で笑って、その実まだまだ世間知らずの小娘を心配して、あれだけの設備を用意できる渋谷さんを警戒している。そこにあるのは秩序かもしれない。そしてきっと、やさしさだった。

まあだからといって初動からあの態度というのは最早コミュ障だと思うれど。…もしかして遠ざけるためにわざとああいった態度を取ってるのかな。

「ご心配ありがとうございます。でもまあ…渋谷さんは大丈夫ですよ。多分ね」

「多分ってアンタね！」

「私は今回限りのアルバイトですし、程よく雑用をこなしてお給料をいただくだけです。松崎さんからのご忠告もいただいたので、まあ警戒しておきますし」

「…あーっ！ もう、これだから最近の若い子は嫌なのよ！」

「ええ、ひどいなあ」

苛立った様子で頭を掻きむしる松崎さんに笑いかければ、フン！

と勢いよく顔をそらされてしまった。あはは、この態度やっぱり素の性格だな。

松崎さんの言っていることはもっともだし、心配はありがたいけ

ど、まあ渋谷さん相手なら本当に大丈夫だろうしなあ。ついつい雑なあしらいのようになってしまふのは仕方ない。

「本当にちゃんと警戒しておきますって……?」
松崎さん

仕方がないので重ねるように笑いかけようとして、ふと、いつの間にか松崎さんがすっかり黙り込んでしまっていることに気が付いた。

「……ねえ、…さつきまで、ドア、開いてたわよ、ね?」

——まさか。

まるで氷水をかけられたかのように一気に雰囲気の変わった松崎さんの、震えた声。固い顔で何かを見つめる彼女の、その唐突な問い。その内容に思い当たるものがひとつあり、パツとそれを——松崎さんの見ている方向へ顔を向ければ、

「……退路は常に確保、を心がけていたはずなんですけどね」

ピツタリと閉じた、教室のドア。



「な、——なんでよ!」

それは振り払うような声だった。カツカツとヒールを鳴らしてドアに向かっていく松崎さん。その足音はあからさまに大きく、体に走った恐怖を振り払おうとしているようにも見受けられる。…まずいな。少し錯乱しているか? 念のため小走りで後を追う。

……ドアが開いていたはず、というのは松崎さんの勘違いではない。私は必ず退路を確保することに気を付けながら行動していたか

らドアは必ず開けたままにしていたし、松崎さんが閉めたような姿も見えていないし音も聞いてない。

—— 私たち以外の誰かが閉めた？ でも、なぜ、誰が。旧校舎に居るのは滝川さんや渋谷さんやジョンだけのはずだ。その人たちにしたって、わざわざ声もかけずにドアだけ閉めていくなんてことするか？

ガタツ、

「…ちよつと、」

ガタ、ガタガタ、

「何よー！」

「松崎さん、」

ガタガタガタガタ!!

「なんつ、なんで開かないの!?!」

「松崎さん落ち着いてください!」

顔色を失った松崎さんが必死にドアをゆする。けれどドアは開かない。

嫌な流れだ。いつの間にかドアが閉まっていて、開けようとしても開かない？ 明らかに不自然な現象。舞台はいわくつきの旧校舎。ああ、らしい展開になってきたじゃないか。

「開けて!! 開けてよ!!」

「松崎さん、落ち着いて」

こつちだつて身震いするものはあるが、けれど現状、パニックにな

りかけてる松崎さんを落ち着かせるのが優先事項だ。

ドアノブを握りしめているその手にできるだけ優しく手を添え、ちよつとちからを込めて引きはがす。

「松崎さん、大丈夫ですよ。古い校舎だから立て付けが悪くなってるのか…引つかかっているだけかもしれないですから。大丈夫、ちゃんと開きますよ」

「——あ、……え、ええ…そうね、そう……」

松崎さんの両手を握り締め、しっかりと目を見て静かに語りかければ、ハツとしたように謝られた。どうやら落ち着いてくれたらしい。…よかった、あんまり暴れられたら実力行使に出るしかなかったかもしれないから。

「ドア、確認してみるので少し離れてもらっていいですか？」

「え、ええ……」

ゆつくり松崎さんの手を放し、ドアと向き合ってみる。…うん、閉まってるなあ。絶対閉めてなかったのに。

とりあえずささくれに気をつけながらドアに手をかけて、スライドさせようとちからを込めれば、

ガタツ…ガタガタツ

なるほど開かない。

問題はこれがなぜ開かないかなんだけど……

ガタガタツガタツガタツ

手始めに繰り返し何度も揺らしてみれば、——何か、違和感、
が？

「ね、ねえやっぱ——」、「
「オイどうした!？」

揺らしても開かないドアに顔を曇らせていく松崎さんが何かを言おうとしたのと同時に、ドアの向こうの廊下を走る足音と滝川さんの声が聞こえた。どうやらさっきの松崎さんの声が聞こえて総出で対処しに来てくれたらしい。

「何が——まさか開かねえのか!？」

「Are you OK!? 怪我はしてはりませんか!？」

「：滝川さん、ジョン、少し静かにしてもらえますか」

「はあ？ 静かについて、」

「幸村、状況の説明を」

閉じた扉に、さっきの松崎さんの叫び声を合わせて、『ドアが開かないのではないか』という結論になったらしい滝川さんが焦った声でドアを揺らす。ジョンの慌てた声も聞こえる。ガツタガツタと揺れるドアの動きを見ていれば——ああうん、やっぱり。

さっき抱いた違和感のはつきりと知覚でき、努めて冷静な渋谷さん（このシチュエーションでそのテンションは流石としか言いようがない。というかいつの間にか名字を呼び捨てになっただけの方が気になる）の声に確信をもって答えることができた。

「ドアが開かなくなっちゃったんですけど、下の方を確認してもらっていいですか？ 何か引つかかってみたいなので」

「下？ ちょっと待ってろー!」

パツとドアの前の気配がしゃがみ込む。これは滝川さんだな。うん、間違っても渋谷さんではない。

「ああ？ 何だこれ…」

ガタガタ、ゴトゴトとドアを揺らしながら何かを見つけたらしい滝川さんの怪訝な声が聞こえる。…なんか、ヤな予感がしてきたな。

少ししてガララ、と開かれた扉の先には、心配そうな顔をしたジョンと、ため息を吐く滝川さんと、何かを触っている渋谷さんと、…あれ、知らない女の子がいる。

「な、なにが挟まったのよ？」

「釘だよーぎ！ つたく、これくらいで騒ぎやがって」

「はあ!? 仕方ないじゃない開いてたドアがいつの間にか閉まってて、しかも開かなかったんだから!!」

ギャン！ と松崎さんが滝川さんに噛みつく。一周回って仲良いなあのふたり。滝川さんのリアクションは心配してた分拍子抜けしただけだと思うけど、松崎さんからすればバカにされたと同義なのだろう。何にでも噛みつくその反射神経は素晴らしいと思う。

「渋谷さん、その釘見せてもらってもいいですか？」

「……ああ」

受け取った釘はほどほどに錆びていて、おそらく旧校舎に置き去りにされてた資材のひとつだろう。…けど、資材が置かれていたのは2階で、こんなところに釘が落ちているのは少しおかしい気もする。いや、たとえば偶然落ちていたとしても、何故それが急にドアの隙間に挟まったりしたのか。そもそも、どうしてドアが閉まっていたのか。

……あの教室のドア、確か、擦り切れてるのかスライド音があんまりしなかったよな。

「この釘、どうなっていました？」

「…ドアと金具の隙間にめり込んでいた」

渋谷さんは私を見ない。…随分と淡泊だ。興味もなさそうで、まるで『取るに足らないこと』だと思っっているかのような態度だ。

——ああやっぱりこの人、何かに気づいて黙ってるんだな。

それは妙な確信だった。

「絶対ここ、なんかいるのよ!」

ひとり可能性を思い浮かべていれば、いくらか回復したらしい松崎さんが唸るように声を荒げる。「ドアが開かねえのは釘だっただろう」と滝川さんが言えば、「じゃあドアが勝手に閉まってその隙間に偶然ドアが開かなくなるくらい釘がめり込んだっていうの!？」と松崎さんが返す。正論だ。偶然にしてはできすぎてる。

まあそう思うのも仕方がない出来事だった。確かに説明がつかないそれに、滝川さんがう、と押し黙る。

「——偶然でしょう」

「——なんですって?」

けれど、鈴を転がすような声がたたつ切った。ギロリ、と松崎さんがその声の主である少女を睨みつける。

——という間にかいた、知らない子だ。校長はまた業者（あるいは霊能力者）を増やしたのだろうか。なんというか、見境がないなあ。

「ここに霊は居ませんわ」

「……渋谷さん、彼女は?」

「霊媒師の原真砂子だ。口寄せが上手く…日本では一流の霊媒師だろう」

——思わず目を見開いてしまった。

「? ……口寄せとは霊を呼び出すことだが」

「ああいえ、はい」

いや、それを疑問に思ったわけではなく。——驚いたな。あの（と言えるほど為人を深く知っている訳では無いけれど）渋谷さんが、皮肉でもなんでもなく本物の霊能力者だと断言し一流とまで評価するなんて。…知り合い、か？

「アタシは顔で売ってるエセ霊能力者とは違うのよ!!」

「容姿をお褒め載いて光栄ですわ」

お見事。思わず笑いそうになったのを咳払いで誤魔化せば、こちらまで松崎さんに睨まれてしまった。ついでに渋谷さんから『この場に居るのがめんどくさい』というかのような視線を送られているので、そろそろ状況を動かすべきか。

「うーん」と呟けば、いつの間にか全員の視線が私に集まっていた。

「うん、まず、駆けつけていただきありがとうございます」

「えっ、ああ、おう」

「ご無事ならよかったです」

「で、とりあえず、移動しませんか？ 霊がいるいないにかかわらず、詳しい話は——」

ちらり、と渋谷さんを見ればため息をひとつ。うん、許可は下りたな。

「——私たちのベースで」

「ぜーったいここにいる地霊よ!」
「地霊?」

移動したベースにて、カシユ、と缶ビールの蓋を切った松崎さんが断言する。地霊、とは。地縛霊のことだろうか。いやそれより、

「松崎さん、缶ビールはちよつと…」

「何よ! アタシの勝手でしょ!」

「はいはい、落ち着いて…まだ何が起こったかもわかっていないのに、アルコールで頭が回らなくなっちゃったら困るじゃないですか。からだの動きにも支障が出るし…あと、ここは旧校舎ですけど一応学校の敷地内なので」

「…んもう、分かったわよ。止めればいいんでしょ止めればっ」

ふんっ! とそっぽを向くけど缶ビールは置いてくれた松崎さんに簡単にお礼を言つて、「それで、地霊って言うのは地縛霊のことですか?」と聞いてみた。

「ちよつと違うわ。地縛霊は何らかの未練があつてその場に縛られるタイプの霊で、地霊っていうのはそこに住んでんのよ。土地そのものの…精霊のこと」

「つまり何かがあつてそこに居る霊と、場所ないし概念に生命が宿つて生まれた霊ってことですか?」

「…そうね、大体そんな感じかしら」

なるほど。幽霊社会も奥が深いな。

「俺はむしろ地縛霊だと思うけどな。ここ昔なんかあつたんじゃねえの?」

「……まあ、あつたと言えば、ありますね」

「だろ？　だから地縛霊が棲み家、つまり自分の執着の行き先がなくなるのを恐れて工事を妨害している……どうだ？」

「あー……」

ふと思ったんだけど、このふたりって旧校舎の噂とかを知らないのだろうか。校長からは何も連絡を受けてない？　原さんは「霊は居ない」と断言してるから興味なさそうだけど、松崎さんたちはこれからの調査を考えたら（別に協力しなくても現場がブッキングしてるんだし）情報共有しておいた方がいいんだろうか。

ちらりと渋谷さんを見て見れば、さっきの釘を手に何かを考えこんでいるようだった。けれど私の視線に気づいたのかこちらを見て話の流れを察してくれたようで、好きにしろ、とばかりに視線をそらされた。

……はいはい。

上司さまからのオツケーがでたのでその場にいる全員に、簡単にだがこの旧校舎の来歴を伝えてみれば、ジョンと松崎さんと滝川さんは少し悩んでいるようだった。

『あまりに問題が起きすぎている』から土地に問題があるのか、単純に『死人が居座っている』から問題が起きるのかの判断をしている、ということだろうか。

土地に問題があるのなら、この土地を『領域』^{テリトリー}としている『何か』が立ち入るものや変容をもたらそうとするものをはじいている可能性がある。こっちはシンプルだ。

対して死人が原因だというのなら、例えば誘拐された子なら『引き離された家族』や『自分を攫った犯人』ではなく『閉じ込められ殺された旧校舎』が一番印象に残った、もしくは『縁』ができてしまつて縛られているか、と言う話になる。

けれどなら、なぜ出入りする人間を襲う？　気づいて助けてくれないから？　出入りする人間と誘拐犯を混合して考えてしまっているから？　それとも、手当たり次第に攻撃をしているだけか、なぜ自分

が旧校舎に執着しているのかも分からなくなっているのか……まあとにかく、考察が複雑化してしまう。

これだけだと『原因は死人』の方がめんどくさそうに思うが、『何か』が原因の場合も楽な話じゃない。素人の浅知恵だが、『人知を超えるもの』の思考回路なんて理解できるものじゃないだろうし、ひどく気まぐれで傲慢で頑固かもしれない。どっちにしる厄介な話だ。

……ところで、松崎さんと滝川さんの中では『居る』ことが決定なんでしょうか。話してる内容が『居る』こと前提だし。

「——ジョン、君はどう思う？」

あれはこれとは話す松崎さんや滝川さんの会話を切るように、不意に黙っていた渋谷さんが様子をうかがって黙っていたジョンに聞く。

ここで沈黙を選んでいたジョンに話を振るのはより多くの見解を集めたいのか、ジョンをある程度信用できていると判断しているのか、信用できるかどうか判断するためのサンプル集めか……

いきなり話を振られたジョンはぱちくりと瞬きをして、困ったように眉を下げた。

「わかりまへんです。ふつう、ホーリテッド・ハウス幽霊屋敷の原因はスピリット精霊かゴースト幽霊ですやろ？　ここが地霊ゆかりの土地やったり、ここで悪魔を呼びだしたりしてはるんなら原因は『スベリット人ならざるモノ』やと思うんですけど……ゴースト地縛霊の可能性が無いわけじゃないですし」

ううん、とジョンが唸る。へえ、悪魔召喚。それは考えなかったなあ。

……不思議だ。悪魔と言われただけで眉唾物に聞こえる。『これは妖怪の仕業かもしれない』と言われたらまだ（それでも現実味はないけど）すんなり入るけど、『悪魔』って言われると一気に引かかる。日本じゃあんまり馴染みないからかな。これが文化の違い？

あ、というかジョンは『エクスシスト悪魔祓い』か。なら原因に『悪魔』を入れ

るのは当たり前のことなのかもしれない。

……あれ、『悪魔』^{スピリット}精霊？ 地霊と精霊は違う、のか？

『人じゃないもの』なら『精霊』^{スピリット}なんだろうか。それだと動物霊も『精霊』^{スピリット}？

あるいはその定義は『人知を超えたもの』、という限定だろうか。神様とか悪魔とか、そういうタイプの……もしくは『精神』^{スピリット}で『実体を持たない精神』ということだろうか。

でもそれだと、土地とかは実体があることになる気が……？ 悪魔とかは実体がない扱いになる、のか……？

奥が深いなあ……一朝一夕の素人知識じゃ全然理解が追い付かない。

「とにかく！ アタシは明日除霊するわ。こんな埃っぽくて気味の悪い場所に長居なんてしたくないものっ」

「……無駄なことを。霊は居ないのでから除霊なんて無意味だというのに」

悶々と考え込んでいれば、いつの間にか話がまとまったのか、松崎さんがふん！ と息荒く（苛立ちか、あるいは気合を入れて）ベースを出て行く。

そんな彼女の背に、原さんが冷ややかに溜息を吐く。この子も癖が強いなあ……

「———そう言えば、まだ自己紹介がまだでしたね。この学校の生徒で、そこに居る渋谷一也率いる『渋谷サイキックリサーチ』でアルバイトをしている幸村聖子です」

「……あら。ご丁寧にも、原真砂子と申します。ご存知かと思えますけれど、霊媒師ですわ」

ちょっと唐突だった自己紹介は案外すんなりと受け入れてもらえた。でも壁は感じる距離感だ。いや別にいいんだけど。あまり興味のなさそうな視線がこちらを見る。

「霊媒、というのは霊とのコミュニケーションが取れる方だという認識でいいですか？　口寄せがお上手だと聞きましたか…」

「そのような認識で結構です。あたくしは霊を見、感じとり、彼らを知ることその思いを外界へ伝える者ですわ」

「なるほど。原さんが見える『霊』はどこまでが該当するんですか？

例えば地縛霊とか、浮遊霊とか……そういう違いは影響しますか？」

「……あいにく、浮遊霊の類とは相性がよくありませんわね」

「じゃあ話題に出た『悪魔』や『精霊』といった類は」

「そういったものが見える才能というのは、あたくしの『霊視』とは扱いが違いますの。——さきほどから、一体何かしら」

すう、と原さんが目を細める。——ああ、失敗。あれこれと

聞きすぎてしまったのか、原さんの声が冷たくなってきた。

「失礼でしたね、すみません。侮辱する意味はありませんが…」

「あたくしの霊視があてにならないと？」

「可能性の話ですよ。例えば何も知らずにあなたの『霊は居ない』という意見を聞くのと、あなたの霊視のパターンを把握して『霊は居ない』という意見を聞くのでは思考の幅が変わりますから」

「……そうですか」

ちよつと言いつい訳じみて聞こえてしまったかもしれないな。まあ何でもかんでも鵜呑みにするつもりがないから、つい多く質問をしてしまったけど、渋谷さんが把握してそうだからちよつと余計なことだったかな。

——いや、余計な事だったな。私はただの今回限りの雑用だし、調査の要は渋谷さんだ。私は最低限の応用ができればいい。それ以外は言われたことができればいい。そういう立場でここに居る。それに原さんは協力者でも何でもない、現場がブツキングしただけの

同業他社だ。それを暴き立てようなんて、我ながら恥知らずが過ぎる。

大義名分のない質問はただの好奇心だ。……だめだ、黒田さんを受け流せなくて迷惑をかけてしまったばかりだったのにな。自重を意識するべきだ。今の私は部長せきじんしや長じやないんだから。

判断誤って原さんを不愉快にさせてしまったのは申し訳ない。ただでさえ『霊視』という能力はインチキ扱いをされやすいものだろう。そんな周囲の目を知っている子ならこういった暴くような質問は不躰だった。

「……ところで、渋谷さん、でしたかしら」

「……何か？」

「先ほどから気になっていたのですけれど、あたくし以前あなたにお会いしたことがあったかしら？」

「……いいえ、お初にお目にかかると思いますよ」

「そう……？」

……意味深な間だ。ふい、と私から視線を逸らした原さんの一昔前のナンパみたいな文句にちよつと驚いて、それ以上に渋谷さんの返事の間が気になった。

あんなこと言ってるけど、初対面にしては渋谷さんから原さんへ何かしらの信用のようなものが見える。少なくともその能力を把握しきれていない相手をやすやすと信用してくれるような人ではないし、それに渋谷さんは私に彼女を『一流』と紹介したのだ。どう考えても『渋谷さんは原さんのことを知っている』と思うのが妥当だと思うけど……

このリアクションからして、渋谷さんがすつとぼけてるのか、あるいは『実際に会ったわけではない』のか。……いや、まあいいか。自重自重。

「渋谷さん、そろそろ日が暮れますが、今日はどうしますか？」

「ああ——今日はもういい。僕らも引き上げる」

「お、ボウヤは泊まり込みしねーの？」

「今日はまだ……幸村、明日は泊まり込む予定で準備してこい」
「え」

さらりと告げられた業務命令に思わず固まってしまった。待って、泊まりだつて？

「質問」

「どうぞ」

「メンバーは……」

「僕とお前だが、何か問題が？」

こちらをまつすぐと見る渋谷さんの視線には疚しさはない。いや、そんな下心をもって接してくる人だとは思ってないけど。そんな気持ちで泊まりを宣言されたとも思っていないけど。……うーん、これ本気で分かつて得ない感じか……？

「……いやお前さん、さすがに調査とはいえ若い男女が一緒に泊まり込みつてのはまずいだろ」

「僕にそんな意図はない」

「無くたって外聞してもんがあんの！ 嬢ちゃんのご両親も気が気じゃねーだろうが！ どうか許可もらえねーんじゃねえか？」

おそらく私と同じことを考えたであろう滝川さんが私の代わりとばかりにくちを出す。やっぱりこの人面倒見がいいな……ワツと大声を出した滝川さんのセリフに、ふたりの視線がこちらを刺す。わあ目力強いなあ。

滝川さんの言う通り、許可をもらうのはちよつと厳しいだろう。未成年の少女少女で宿泊施設ではない不安定な廃墟にアルバイトで泊まり込む、というのはあんまりにもあんまりだ。

特に今は居候の身で、越前家の皆さんからしてみれば私は『お預かりしているお嬢さん』ということになるから、下手に実家にいるより突破するのは厳しいかもしれない。

———けれど、この渋谷さんの視線が『無理です』と言っても聞いてくれないさそうだというのをヒシヒシと伝えてくるわけで。かといって、ご厄介になっっている越前家からのお気持ちを無下にする気だってもちろんないわけ。

「滝川さん」

「おう」

「すみませんが、お手すきでしたら明日は一緒に泊まり込みをお願いしてもいいですか？ 『お坊さん』がいると言えば多少はハードルが低くなるので」

「あー……はいはい、仕方ねえな。オニーサンがひと肌脱いでやるよ」

「服は着てください」

「おじよーちゃん??？」

「で、渋谷さん」

「……………」

「努力はしてみますが、許可をもらうのはちよつと難関ですよ。泊まれるかどうかの連絡は明日でも構いませんか？」

「……………分かった」

うわあ不満げ。そんなに思い通りにならないのが気に入らないか。……さて、どうやって越前家の皆さんから許可を貰おうか。下手なことをしたら親に連絡が行って大事になっちゃうだろうし……最近悩み事が多いな。

「I, l l s t a y w i t h y o u t o o .」と言ってくれるジョンの気持ちはありがたいけど、いくらジョンが聖職者でも男の子なんだから余計に状況不利になるだけなんだよなあ。言わないけど。

明日松崎さん捕まえられるかチャレンジしてみようか。